
ホログラム

一之瀬染子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホログラム

【Nコード】

N5144I

【作者名】

一之瀬染子

【あらすじ】

恋愛経験ゼロ、仕事に生きる花はある日、母親にハメられてお見合いをさせられる。愛想もへったくれもないお見合い相手の一言にブチ切れて脱走するが、その後再会。

と思ったら、いきなりプロポーズ？

最悪なお見合い（前書き）

ラブコメなんて慣れないものを書いてみようと 생각합니다。「どこがラブコメ!？」とおっしやる方もいらっしやるでしょうが、これはラブコメ（予定）です。

週一ペースで更新できるよう、頑張ります。

最悪なお見合い

二十六歳。彼氏なし。

というか、恋愛経験ゼロ。悪い？

レンアイって、何？

「あとは若い方同士で」

ホホホとお上品ぶつた笑い声を残して薄情な母親は、仲居さんに庭に案内するよう依頼した。

お見合いなんて聞いてない。

目の前を歩くスーツ姿の男性に聞こえないように、あたしはそつと溜息を吐く。

人見知りをするというほどではないけれど、初対面の相手といきなり二人きりにされるとやっぱり気まずい。しかも、合コンみたいな酒が入るものと違って、形ばかりかしまっているから余計に話しづらい。

たぶん向こうも同じことを思っているんじゃないだろうか。さつきからずっと黙りこんで歩いているだけだもの。

もう一度溜息を吐いて、あたしは視線を目の前の背中から庭に移した。目を引いたのは、薄紫の房がいくつも垂れ下がった藤棚。新緑にわく庭でそこだけ別世界のように見とれた、そのとき。

「え？」

いきなり腕を引っ張られた。

一瞬、なんでそうなったのかわからなかったけれど、どうやらよそ見をしていて危うく池に落ちるところだったらしい。池自体はそんなに大きさもないから深さもそんなにないとは思うけど、お見合いの席で池に落ちるなんて笑い物もいいところだ。

ほっとしたところでようやく自分が今どんな格好かに思い至った。えーと、つまり、腕を引つ張られてバランスを崩した拍子にしがみついていたのだ。お見合い相手に。

「すみません」

あわてて身を離して改めて相手の顔色をうかがう。

お見合い相手の名前は、鈴木龍之介。

第一印象はカッコイイと思った。整った顔立ちっていうのかな、目や鼻といったパーツのバランスがとれている。中性的ではないけれど、綺麗な顔をしている。

ただし、愛想が悪い。いくら気乗りしないからって、普通愛想笑いくらいするものじゃない。それもなくずっと無表情で、こっちが一生懸命話題を振っても「はい」とか「いや」とかばかりでちっとも話が弾まない。いや、あたしもそんなに会話が弾むタイプじゃないけど。

龍之介は無表情のまましげしげとあたしを観察している。

そう、観察しているのだ。眺めているとか見ているじゃなくて観察。正直感じ悪い。

「D……いや、Eか」

はい？

い、いま、今なんて言った。

ボソツと、今確かにボソツと何かを言った。

頭が真っ白になったあたしに追い打ちをかけるように、龍之介は言った。

「ちょっと丸すぎか」

ぷつんとあたしの中で何かが切れた。音じゃなくて、ただ、何か切れる感覚だったかもしれない。

「丸くて、悪かったわね！」

たぶんそんなことを言ったんだと思う。ほとんど反射的にあたしは龍之介を池に突き落した。

池に落ちる派手な音と水しぶきであたしは我に返った。

と同時に池に背を向けて駆け出した。もう、頭の中は焦りと恥ずかしさと怒りでぐるぐるしていたから、音を聞きつけた母たちが龍之介を見て仲居さんと呼ぶ声も、あたしを呼び止める声も何も耳に入らず、あたしはその勢いのまま料亭を飛び出した。夜、電話越しで母に怒られたのは言うまでもない。

人生って思うようにはなかなかいかないものだと思う瞬間ってある。

たとえば、コンビニで最後の一個のおにぎりを横からかつさらわれたときとか、一番会いたくない人に最悪なタイミングで会ったりとか。

なんでここにいるかなあ、この男。というのが真っ先に浮かんだ言葉だった。

さすがに向こうも気づいたらしい。龍之介はあたしを見て、

「山田、花子、さん」

「花です。子はつきません」

一発殴ってやろうか、コンチクショウ。

たぶんすごい顔で睨みつけていたんだろう、龍之介は意外にも素直に頭を下げた。 と思ったら、カゴの中身を覗いただけだった。

「すーげえ量」

龍之介のあきれたような声が、少しずつあたしの神経を逆なでする。

あたしの買い物カゴには、焼酎、梅酒、ワインが合わせて4本。いつもは酒屋で買うんだけど、今夜は仕事で遅くなって閉店時間間に合わなかったのだ。じゃなきゃ誰が割高のコンビニで酒買うもんですか。

あたしは龍之介を無視してレジに向かう。この男に付き合っても気分悪くなるだけで何の得もないのだから。

レジに向かうあたしの背後で龍之介が咳をした。

「こんな時期に風邪なんて、不摂生なんじゃないですか」

つい口が滑った。

すると冷ややかな口調で、

「先日誰かさんに池に突き落とされたもので」

しまった。墓穴を掘ったか。池に突き落とされたのはほかでもないあたしだ。ちよつと嫌味を言ったつもりだったのに、とんだヤブ蛇だわ。

何かを期待するような沈黙が降ってくる。背を向けているため彼が表情を浮かべているのかはわからない。というか、背後からのものすごいプレッシャーがかかっているので怖くて振り向けない。

お前が悪いんだからさつさと謝れという無言の圧力があたしの頭にのしかかってくる。

確かに悪いとは思っている。けど、謝りたくない。デリカシーのない発言をしたのはやつのはうだし、そのことについては何も言っていないのにあたしが謝るのはなんだか理不尽な気がしてならない。理不尽だからとこのまま無視するのも一つの手だけれど、あたしは文句の一つ言いたいところをぐつと我慢して振り返った。

「その節は、とんだご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
頭は下げなかった。代わりにぐつと顎を突き出すようにして睨みつける。

龍之介はわずかに目を瞠るとすぐに意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「ええまあ、クリーニング代に帰りのタクシー代、治療費その他もろもろと」

「ぐ……。も、もとはと言えば、そっちが失礼なことを言ったからでしょう」

「失礼なこと？」

失礼だと思っていないのか、それとも失言そのものに気づいていないのか、本気で考え込む。もしかしたらあたしに聞こえていないと思っただけかもしれない。もしくはあれが地……。

やめよう。

こんなことを考えていても仕方がない。時間も思考のためのエネルギーももつたない。今日は朝まで飲み明かすのだ。そのためにこうやって買い物に来ているんだから、さっさと清算を済ませて帰ろう。

全く同じ道を歩く人間がいてもそうおかしいことじゃない。たまに同じ時間帯にコンビニで買い物した誰かが偶然同じ方向に変える途中でもそれって珍しいことじゃない。

珍しいことじゃない、けど、それは相手にもよると思う。

たとえばそれが印象最悪なお見合い相手だった場合、妙な勘ぐりをしてしまう。後をつけられてるんじゃないかとかそんな。

「なんでついてくるんですか」とよっぽど聞きたいけれど、自意識過剰と思われるから単純に同じ方向なんだと思いたい。特にこの先は結構アパートやマンションが多いし、大丈夫。でもじゃあなんで同じ歩調で後ろを歩いているのか、という疑問が出てくるが、単に前の人を追い抜くことが嫌いなだけかもしれないし、気にするな。気にしちゃダメだ。

アパートの前まできても龍之介は相変わらず後ろにいるようで、さすがに気になって振り返った。が、彼はあたしの横を抜けてさっさと歩いて。。

待って。ちょっと待って。

龍之介が曲がったところは小高いマンションの入り口。

あたしの住むアパートのすぐ隣だった。

……お隣さんってこと？

予兆

なんでよりによってあの印象最悪な見合い相手がご近所さんなのか。しかもそのマンションはつい半年ほど前にできたばかりで、そのせいでうちのアパートの日当たりが悪くなるという因縁もある。しかも分譲。ブルジョアめ。

「それって運命ですよ」

向いに座った後輩の竹本千紗が力を込めて頷いた。

昼休み。いつもは事務所の休憩室で食事を摂るけれど、週に一回、近くにランチを食べに行くのがなんだか習慣になっている。今日がちょうどその日で、一緒に行った千紗にこの間のお見合いのことを根掘り葉掘り訊かれ、その感想がそれだった。

それにしてもどうもこの子、小説やら少女マンガやらゲームやらのせいでいろいろと思考が偏っている節がある。特に恋愛に対しては顕著で、やたらと運命とか赤い糸といった単語を使いたがる。

「ただの偶然でしょ」

きつい言い方にならないよう気をつけながら言っても千紗は聞いちゃいない。

「何言っているんですか、イケメンのお見合い相手が実はご近所さんだなんて、運命以外の何物でもありません！」

ちよつと待つて。

「イケメンだなんてあたし言ったっけ？」

そんなこと言った記憶がないんだけど。

「いえ。でも先輩、顔がタイプじゃなかったらきつとそう言うだろうなと思つて」

違いました、と小首を傾げて訊かれると、否定がしづらい。

しかしあの男はタイプ以前の問題だろう。そう言うつと、

「大丈夫です、顔がよければ許されます」
どんな理屈だ。

日本人口の九割以上を敵に回しそうな台詞をものすごく真面目に言う。そう言えば彼女は面食いだっただ。それにしたってかなり極論というか、偏った意見だ。

「あ、もちろん顔だけじゃないですよ、でもやっぱり顔は大事です。第一印象はまず外見ですし、中身はその次、初対面で相手の性格まで把握できないですもん」

あたしが返答できずにいるので、千紗は慌ててそう付け加える。
なんだかさつきといっていることが違う気がするのはいのせいかしら。

顔がよければっていうのは言い過ぎでも、その後の発言なら何となくわかる。確かに第一印象は外見が一番で、あとはその人の発言とかで相手の人となりがぼんやり理解するしかない。外見っていうのは顔の造形やスタイルだけじゃなくて、雰囲気や表情ももちろん入る。異性同性問わず、雰囲気的第一印象が悪い相手とはあまりお近づきになりたくないのも事実だ。たぶん彼女が言いたいのもそういうことだと思う。だからこそ、

「その理屈からするとこれ以上かかわり合いたくない相手だわね」
たぶんお互いが相手のことを嫌な奴と思っている。

「いやいやよも好きのうちっていうじゃないですか。きっとこれから恋愛に発展していくんですよ」

すっかりぬるくなったコーヒーを飲んで妄想を口にする。そうしてまた妄想の世界に入り込んだ表情のまま、デザートチョコケーキを頬張る。

「始めは反発しながら、次第に気になっていく二人。そして……」
いったい何を想像しているのか、歓声を上げる。その声が意外と店内に響いて一斉に注目を浴びる。

反発するもなにも、そもそも接点がほとんどないんだからこれ以上何かが起こると思えないんだけど。でもそんなことを言ったと

ころで妄想モードの千紗は聞くわけない。

と、目が合った。

すると千紗はキラキラと目を輝かせて、

「素敵です、先輩。完璧！」

何を想像したんだ、この子は。

「よくわからないけど、ありがとう。で、そろそろ現実に戻ってきてくれると嬉しいんだけど」

時計を見ればいい時間である。先ほどとは違う悲鳴を上げて千紗はデザートを平らげると、あたしたちはせわしなく店を出た。

「すみません、調子に乗っちゃって」

ところで、と急にあらたまった表情を浮かべた。

「次の仕事先、もう決まりました？」

昨今の不況の煽りで派遣切りなるものが多発している。それは他人事ではなく、あたしもつい十日ほど前に契約更新ができないと部長に言われた。あと一月、夏になれば契約が切れる。その後のことはまだ具体的に考えていないけど、なるべく早く職に就けるよう派遣会社に言っではいるが、まだ返事はない。

「全然。ま、いざとなったらバイトでもして凌ぐつもりではいるけど」

「そうですか……」

「あんまりグダグダ考えててもどうしようもないし。なるようになるわよ」

仕事もタイミングだ。どんなに頑張っても探してもないときはないし、逆にある時はある。そのタイミングさえ逃さなければなんとかなると思う。

「それに、新しい職場でいい出会いもあるかもしれないしね」

すると千紗は納得した様子で大きく頷いた。

「新しい職場でイケメンと再会、とかあるかもしれないよ。そしてたらもう運命ですよね！」

そっちなか。

千紗の妄想は事務所に戻るまで止まらなかった。いや、事務所に戻っても暇に飽かして喋り倒す。ちょうどいいことに部長は不在で彼女を止める人間はいなかったおかげで妄想はどんどん膨らんでいくように、初デートから結婚までの紆余曲折まで延々と続いた。

喫茶店にて

心地いいジャズのリズムが流れ込んでくる。

ともすれば酔うほどに濃厚なコーヒーの香りに思わず息を吐く。

仕事帰りに行きつけの喫茶店に寄ったのはあまりの疲労感のためだった。この状態では家に帰り着くことはままならないかもしれないと判断し、一休みしようと思ったのだ。

喫茶店、と述べたように、最近流行りのカフェではない。商店街の角にひっそりと佇む姿はよくいえば年季が入っていて、パツと見た限りでは営業しているかどうかも怪しい雰囲気を醸し出しているけれど中に入れば落ち着いた照明にセンスのいい家具が出迎えてくれるので意外とお客は多い。週末ともなればそう多くはない席数の店内はいつも一杯になるくらい。

カウンターの隅に座って買ってきた雑誌をぱらぱらとめくっていると、自分のペースが戻ってくる気がする。

ゆるりと湯気の立つコーヒーを一口。うーん、しみわたる。

ホッと嘆息してまた雑誌に目を落とす。

BGMに紛れてとある会話が聞こえてきたのは多分偶然だった。

「もう一回言って」

鋭い女性の声。周りに気を使って小声ではあるけれど、カウンターのあたしの席のちょうど後ろだったのでとらえることができた。

「別れよう、ってどういふこと」

ひよっとして修羅場ってやつ？

雑誌のページをめくり気にしていない様子を装いながら、後ろの会話を耳をすませる。

「言葉その通りの意味だけど？」

相手の男は面倒臭そうな調子で言う。彼女の気持ちなんて気にも留めてない風に。

どうして、と言う彼女の声がちよっと震えているような気がした。

「わ、別れて、それからどうするのよ」

「昔のように仕事上の関係に戻ればいいだろう」

「どうやら元は仕事仲間のようである。それにしてもなに勝手なことをぬかしているんだ、この男は。」

「そんなに簡単に割り切れるわけじゃないじゃない」

彼女の声が段々と泣き声になっていつていつていっている気がする。きっと男のことがまだ好きなんだろう。聞いている限りでは男のほうがいきなり別れ話を切り出したっばいし。

陶器が触れあう音が小さく響き、男がため息を吐く気配がして、ぼそぼそと何か言っていたみたいけどよく聞き取れなかった。まったく、もう少しハキハキと喋ればいいのに。

「……じゃあ、せめて理由くらい教えて」

しばらくの沈黙の後に彼女が言った。

理由も言わずに別れ話を切り出されたら、そりゃあまあびつくりするしシヨックだろう。

「恋愛対象としての興味を失ったから」

男の台詞が終わると同時にパシャっという水音がした。

「最低」

そう吐き捨てて、彼女は店を出て行った。

……パシャッ？

振り返りたい衝動をこらえながら後ろでなにが起こったのかわ分なりに想像してみる。多分彼女が水を男にぶちまけたんだろう。コーヒーだったりしたら結構ヒサンなことになりかねない。下手したら火傷するし、そうでなくても服にシミがつくし。それにしてもなんだか古いドラマにありそうなシチュエーションだ。現実にするか、普通。

我に返ったのは男が大きく息を吐いたからだ。

椅子から立ち上がる気配があつて、ゆっくりと歩いて行く後ろ姿をそろりと盗み見る。すらりとしたシルエットになんともなく見覚えがあるような気がしたけれど、きつと気のせいだ。

男の知り合いなんて、数えるほどしかないんだから。

ぬるくなつたコーヒーを一気に飲み干した。なんとなく興をそがれて雑誌を眺める気分じゃなくなつてしまった。会計を済ませて店を出るとスーパーによって買い物をした。

夜、帰つてEメールのチェックをしたら、派遣会社からメールが届いていた。

思わぬ展開

嫌な予感が全くなかったとは言わない。

新しい職場でイケメンと再会、とかあるかもしれませんがよ。そしたらもう運命ですよ。

何気ない会話の中で後輩がはずみで漏らした言葉。そんな都合のいいことあるわけないと思った。思っていた。

鈴木龍之介。

この男の顔を見るまでは。

発端は半月前、営業の本田さんに声をかけられたとき。

「もう次の仕事は決まってるの？」

何気なくかけられた言葉に、その時まだ仕事を決めかねていたあたしは正直に答えたのだ。

「いえ、まだ決められなくて……」

派遣会社からの紹介はあった。でもどちらもピンと来なくて何日も保留にしていた。早く決めないとほかの人に決まるってわかっていても、なかなか決められなくて、もういつそのこと派遣じゃなくて求人応募しようかと思っっていたくらい。

それを言うと本田さんは、

「ちょうどよかった。私の知り合いの会社で事務員を探しているんだけど、どう？」

「本田さんのお知り合い、ですか？」

「うん、そう。なんだか急に人が辞めちゃったみたいで。山田さんの働きぶりも知ってるし、勝手だけどちらっと話はしてあるの」

さすがは女だてらに社内でトップクラスの成約率を誇る営業さんだと感心してしまった。「話はしてある」という時点でなんとなく断れない雰囲気を作り出している。

返答に困ったあたしの考えていることなんて、きっと彼女にはお見通しで、

「あ、でも無理にっていうわけじゃないのよ。もしよかったらって思ってる」

あわてた様子で付け加えるところも予想済みといった様子で、なんとなく居心地が悪い。

「とりあえず、ええと、お話だけでも伺っていいですか」

ため息をこらえてそう言うと、ほっとしたように本田さんが笑った。

「よかった、そう言ってもらえて」

いや、そう言うしかないような話しぶりだったから。

まあ一つの候補として聞いておく分には悪くない。

「知り合いつてというのが設計デザインの会社を経営しているんだけどね。あ、会社つて言っても従業員三人の小さなところなんだけどさっきも言ったけど、つい最近経理の子が急に辞めちゃって困っているの。事務だから残業もめったにさせないし、金銭面では今と同じくらいは出すつて言ってくれているし、悪い話じゃないと思うんだけど……」

ここぞとばかりに営業モードで喋りだす本田さん。やばい、本気で売り込もうとしている。

質問を挟む余地もないくらいに滑らかなその喋りは立て板に水どころか溪流のごとくよどみない。向かいの千紗もポカンとした顔でただ流れに身を任せるしかない様子。

「……で、どう？」

期待たつぷりの瞳で押し切られ、結局あたしはそのお知り合いの会社に話を聞きに行くことになった。

思わぬ展開 - 2

早いほうがいいから、という本田さんに退社後に引っ張られて連れてこられたのは閑静な住宅地の中にある一軒家。コンクリートむき出しの壁にぽんぽんと丸いガラス窓が並んでいる。いかにも建築デザイン会社という感じ。話によると一階が事務所で二階三階が住宅になっているそうだ。

通された応接間で本田さんの二十年来の友人という社長と対面した。細身のスーツを着た、おっとりとした話し方の感じのいい女性だった。本田さんのイメージとは全然違う。いや、全然違うからこそあんがい馬が合うのかもしれない。

「噂通り、素敵なお嬢さんね」

本田さんに紹介されて頭を下げたあたしに、にこやかに笑みを浮かべた。いただいた名刺には「マドカデザイン代表取締役 金崎まどか」と書いてある。

「どこまで聞いていますかしら」

「ほぼ説明はしているわ」と本田さん。

ええと、ここにきてからあたしまだ返事と相づちくらいしかまともにできてないんだけど。

「そう。なら話は早いわね」

ポンと手を打って話し出した内容は、本田さんから聞いた話そのまま。そうしてどこからともなく電卓を取り出し、社員扱いで諸手当はもちろん保険もありで、勤務時間や月の手取りのおおよその金額といった待遇の話を、おっとりした印象がうそみたいに怒濤の勢いで言葉をつないでいく。

この押しの強さはさすが本田さんのお友達だ。多分三十分くらいはひたすら話を聞いていただろうか。締め言葉のように、

「どうかしら。来てもらえるかしら？」

期待いつぱいの視線が前と左側から注がれた。
ええと。

ここで「やっぱりやめます」とは言えなくて、ましてや少し考えさせて、といった中途半端な回答はさらにできなくて、

「ぜ、ぜひよろしくお願いします」

ひきつりそうになる笑顔を必死で取り繕いながらそう答えるしかなかった。

ありがとう、と金崎さんが明るい笑顔を浮かべて言った時、応接間のドアをノックする音が聞こえ、次いで開いて、

「そろそろお茶が冷めたころだと思ってお持ちしました」

細身で背の高い男性がそう言っただけでいい。お盆の陰から左手の薬指に銀の指輪が見えた。骨ばった手がぎこちない仕草で茶卓を運ぶ。

「ちょうどよかった。吉井君、来月から働いてもらうことになった山田花さんよ。よろしくね」

吉井君、と呼ばれた男性はあたしを見て穏やかにほほ笑んだ。

「これが噂の里美さんの後輩ですね。はじめまして、吉井虎太郎です」

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

人懐っこいその笑顔についつられて会釈を返した。

パンツと鋭い音が頬をたたいた。

目と鼻の先にごつい手があった。どうやらさっきの音は目の前で手をたたいた音だったようだ。

「目が覚めましたか」

なんとなくトゲがある口調で龍之介が言った。

「ところで、あなたがなんでここに？」

ここ、というのはマドカデザインの事務所に、ということだろう。むしろそれはこっちの台詞だと思うんだけど。

「ゲツ、モーニーン！」

勢いよく開いたドアから吉井さんが朝から異常なテンションで入ってくる。

「あれ、龍くんの花ちゃん、どうしたの、こんな入口で突っ立って？」

言われてみればそうだ。入り口の所で龍之介と鉢合わせ、立ち尽くしていたのだ。ちょうどあとから入ってきた吉井さんが後ろにいるのでなんとなく息苦しい。

「あの……」

戸惑ったあたしの声よりも、たぶん目の前の龍之介の顔のほうの方がかりやすかったのだろう。吉井さんは一人納得した様子で、

「ああ、二人は初対面だったよね。彼は鈴木龍之介くん。うちの三人目の設計士だよ。で、龍くん、彼女がこないだから話していた、今日からリカちゃんの代わりに事務で入る子だよ。名前は」

「山田花子さん」

「花、です。子はつきません」

いったい何回間違えれば気が済むんだこの男は。

上目づかいに睨んでみるが、向こうはあたしのことなんて眼中にないようで吉井さんと視線を合わせている。

その吉井さんは龍之介があたしの名前を言い当てたのに驚いた様子だった。

「二人、知り合いだったんだ？」

それなら話が早い、これから仲良くよろしくねとのんきに笑うその横っ面を思いつきりひっぴばたいやりたい衝動を必死でこらえて、彼がさつき言った言葉を何度も反芻した。

三人目の設計士、ってことは。

ようやく状況を理解したあたしに向かって、龍之介は今まで見たこともないくらいとびっきりの笑顔を浮かべて、

「これからよろしく願います、山田さん」

あたしはまるで蛇に睨まれた蛙にでもなったように身動きが取れ

な
か
っ
た。

アクマの誘い

神様ってやつが本当に存在するのなら、そいつの所に行って思いっきりひっぱたいてやりたい。

設計デザイン会社って最初に言われたときは、建築のこととか専門的なことをさせられるのかと内心ビビっていた。

「設計事務所って言ってもお願いするのは基本的な事務だから」
社長のまどかさん　そう呼ぶように言われた　が言うように、仕事内容としては前の仕事とあんまり大差なかった。言われたとおりにコピーを取って、銀行行ったり、来客があればお茶出ししたりと、本当に今までと変わらない。

それは別にいいんだけど、問題は机や本棚のレイアウトを覚えることだ。今も専門書を渡されて棚の前をうろろしている。

ついさっき龍之介からあたりまえのように渡されたんだけど、なんでこれをあたしがしまわれないといけないんだろう。自分で出したんなら自分でしまえばいいじゃない。慣れないあたしよりも、出した本人なら場所だってわかってるだろうし、はるかに効率的じゃない、と言えなかったあたしの意気地なし。

このあたりだろうと持ち上げた本がふいに手の中から消えた。

「これはこつちだよ」

にこやかな声で吉井さんが右手の棚に本をしまってくれた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

明るく笑って、

「どう、もう慣れたかな？」

「まだ三日目ですよ。全然慣れません」

「そうだよねえ。でもそんなあなたに朗報が」

ビシツと親指を立てて決める仕草と相まって、なんだかテレビシヨッピングでも見ている気分だ。

「今夜歓迎会するから、よろしくね」

勢いにのまれて頷きかけて首をひねる。

……今夜？

「聞いていませんけど」

「うん、今決めたから」

今って。それは決めたんじゃないじゃなくて単に思いついたただけなんじゃないかろうか。

「大丈夫、大丈夫。まどかさんにもがつつり許可取るし、龍くんは事後承諾でいいから」

本当にそれでいいのか。

まだ働き出して三日だけど、まどかさんをはじめ皆ものすごい仕事量だということは分かっているつもりだ。いつも朝は誰かしら先に出勤して仕事をしているし、帰りもそう。あたし一人だけ定時で帰っている。それだけ忙しいのに、あたしの歓迎会なんてしてる場合じゃないと思うんだけど。

「いいからいいから。……本音を言つと、こついつときじゃないと思いつき飲めないからね」

ちらりとまどかさんの方を見てからあたしにウインクする。

まあなんというか、あたしをダシに飲み会をしたいらしい。別にそんないいダシは出ないんだけど、まあいいか。

「わかりました。じゃあ、楽しみにしてますね」

龍之介も来るだろうということとはまあ頭の隅に追いやって、せつかく開いてくれる予定の歓迎会だもの、楽しもうと思った。

波乱の幕開け

結局、歓迎会はあたしと吉井さんと龍之介の三人になった。まだかさんは仕事でどうしても抜けられないらしい。

「本当にごめんなさいね。三人でしつかり楽しんできてね」

と申し訳そうに見送ってくれた。

「と、いうことで」

どん、と目の前に置かれたジヨツキを手に満面の笑顔を浮かべた吉井さんが切り出す。

「花ちゃんの歓迎会を始めます。かんぱーい！」

高々と持ち上げたジヨツキをカチンと鳴らして一気飲み。

「好きなものどんどん頼んでいいからね。まだかさんから軍資金をしつかり預かっているから」

渡されたメニューを見て戸惑っているあたしに吉井さんは笑顔を向ける。

吉井さんが予約を取った店はいかにもちょっとお高い印象だった。チエーンの居酒屋とは違って照明は控えめだし、インテリアもさりげないけどお洒落でモダン。店員さんの態度も落ち着いていて変に大声出したりしないし、全体的に雰囲気がいい。

その印象は当たっていて、メニューの単価もびっくりするほどではないにしろ、ちょっと高めでそうホイホイ頼めない気がして迷っているあたしからメニューを取ったのは龍之介。気後れする様子もなく淡々とメニューを読み上げる。

「チーズ盛り合わせにガーリックポテト、シーザーサラダとマルゲリータとチーズオムレツとシャンディガフ」

「あと、タランチュラをロックで」

ついでにと頼んだチヨイスが意外だったのか、龍之介は眉をひそめていたが気にしないことにした。というか、きつと何を頼んだのかわかってないからだろうとは思っけど。

わかっていないと言えば吉井さんも同じで、運ばれてきた鮮やかなブルーの液体に興味津津の様子だ。

「何頼んだの？」

「テキーラです」

そう答えたときの吉井さんはものすごく驚いていた。

「実は結構お酒に強いんだね」

見かけによらないときりに感心している。

でも別にびっくりするほど強いわけではない。慣れない日本酒なんかは一号飲めば酔っ払うし、カクテルも苦手。そんなに種類を飲まないし、こうロックだ水割りだつて頼むから強いと思われがちだけど、飲むペースはものすごく遅い。ロックといっても氷が半分以上融けてやっとな飲み始めるくらいに。

「そんなことないです。テキーラっていつでも、これは結構アルコール低いですから」

その上甘味が強くてアルコールの苦みもそこまで感じないから飲みやすいのだ。以前知り合いに勧められて飲んでいっぺんでファンになった。でも居酒屋なんかにはあんまり置いていなくてめったに飲めないから、あると嬉しくなつてつい頼んでしまう。

興味をそそられたのか吉井さんもタランチュラを頼んでいた。

「へえー、こんなお酒があるなんて知らなかったな」

「……あんまり飲みすぎると明日に響きますよ」

と龍之介が言っても、

「このくらい大丈夫。なんともないさー」

上機嫌で飲み続ける吉井さんの携帯が突然鳴り出した。怪訝そうに着信を認めて席を立つ。

とたんに落ちる重苦しい沈黙に押しつぶされそうになりながら、あたしはひたすらグラスを傾ける。龍之介は特に何か話題を提供するでもなく、黙々と食べている。

グラスがほとんど空になったころになってようやく吉井さんが戻ってきて、

「ごめん！」

申し訳なさそうな、名残惜しそうな表情を浮かべて両手を合わせるとそう言った。なんでも、見積もりに不備があったとかで急ぎ事務所に戻って修正をかけないといけないらしい。

「せっかく花ちゃんのお迎えなのにこんなことになって、本当にごめん。先に帰るけど、二人はゆっくりして行ってよね」

吉井さんは、まどかさんから預かったお金を龍之介に渡すとあわてた様子で店を後にした。

……えーと。

こういつときつてどうしたらいいんだろう。

なにか場を持たせる話題でもあれば一番なんだろうけどそんなものないし、かといって黙っているのも気まずいものがある。手持ちぶさたでグラスをいじってみても特に何か目新しいものがあるわけでもなく、龍之介が話題を提供する気配もない。

考えあぐねていると、向かいの席から嘆息が聞こえた。

「帰りませんか」

その提案に異論はなかった。問題は一つあったけれど。

ポツポツと街灯が並ぶ道を龍之介の後ろに続くように歩きながらそつと息を吐いた。

帰る方向が同じせいで必然的に帰り道も一緒になる。あえて別ルートを選ぶのも不自然だし何より遠回りなので数歩距離を置いて歩いているけれど、相変わらず会話はゼロ。向かい合って座って無言よりはまだマシだけど息が詰まることには変わりがない。

足元を眺めながら早くアパートに着かないかと、そればかり考えていてあまり前を気にしていなかったから、龍之介が立ち止まったことに気付かなかつた。

ぶつかる寸前で気がついて止まったけれど、一体何だというんだろう。

見上げて街灯から距離があるせいで龍之介の表情はよく見えな

「入らないんですか？」

アパート、と指を指されてもうすぐそこまで帰ってきていることに気付いた。

「帰ります。今日はお疲れ様でした」

一礼してアパートへ向かおうとして、名前を呼ばれて振り返る。

「あなたに言おうと思っていたことがあるんです」
嫌な予感がする。

言おうと思っていたことってあれかしら。お見合いの時のクリーニング代の請求とか、苦情とか請求とか請求とか。

断固として払わないけど。

「結婚してください」

いたちっつこ

「そんなの払えませんか」

言っただけからしまったと思った。というか何を言っているんだろう、あたしは。

混乱しているのかしら。

混乱しているんだろう。

だっぴいきなり突然何の前触れもなくそんなこと言われるなんて、思っただけでもないじゃない。てっきり請求書を送りつけられるかと思っただけ。それにお見合いの席でこの男を池に突き落として、結果的に風邪をひかせたのは事実だし、原因は向こうにあるにしろ、過失はあたしの方にあるんだから。

それよりも龍之介は今なんて言った。

ケッコンって言ったよね。

ケッコンってなんだっけ。

ケッコン、結婚。

「……結婚？」

「そう言いましたけど？」

あたしのつぶやきに即座に反応する龍之介。街灯を背にしているからシルエットしかよくわからないけど、なんとなく、笑みを浮かべているような気がする。

「冗談、ですよね」

とりあえず確認してみる。この状況はどう見ても冗談だと思う。というか、そうじゃない可能性なんてありえない。

だっぴいこうもタイミング良くこんな二人きりとかあり得ないし。もしかしたら、まだかさんや吉井さんもグルでドツキリを仕掛けているんじゃないだろうか。あ、そう思ったら、なんだか急に街灯や電柱の陰が気になってきた。

「どうして冗談だと思うんですか？」

せわしなく周りを見ていたあたしに向かって龍之介が聞いてくる。なんて見え透いた質問をするんだろう。

「だってあり得ないじゃないですか。普通に考えて、結婚なんて」
恋人でも、知り合いですらないのに。

「あたしをからかっているんでしょう」
そうとしか考えられない。

「からかって、俺になにか得があるとしても？」

おおげさのため息を吐いて龍之介が言った。心なしか声のトーンが下がっている気がする。

「そ、それは、知りませんけど」

「じゃあなんでそう思ったんですか」

「たいして知りもしない相手に向かってそんなことを突然言い出すからです」

何回言えば理解するんだろう、この男は。

「たいして知りもしない、ですか」

龍之介はわずかに考えるそぶりを見せて、

「本当に？」

きらり、と瞳が光った。

「昭和五十八年五月六日生まれ。高校は県立浜中南高校。成績は中の上、部活動は」

「ちよ、ちよっと待って！」

あわてて龍之介の言葉をさえぎる。いきなり何を言い出すかと思えば。

「なんでそんなこと知ってるんですか」

プライバシーの侵害だわ。情報漏洩にもほどがあるわ。

そう思っていると、龍之介はしれっとした様子で、

「釣り書きにありましたから」

ああなるほど、納得したわ。お見合い写真と一緒に入っているアレの情報ね。

お見合い写真と言えば、あたしの写真って一体何を使ったんだろ

う。成人式の写真とかだつたら嫌だな。

「それに突然じゃないと思いますか」

「どういう理屈ですか」

「お見合いをするということは、結婚が前提でしょう」

それはそうだけでも、でも。

「お見合いは破談になつたつて聞いてますけど」

あれで結婚に転ぶなんてことがあるわけない。龍之介の方の母親はかなり怒っていたらしいし、仲人さんもお手上げだと言っていたらしい。

「釣り書きはかえつてきましたか？」

「さあ、聞いていませんけど」

怖くて聞けてないのが事実だ。はっきりいって、母親にお見合いの「お」の字でも言おうものならものすごい剣幕でお叱りを受けるのがわかつているのであるべく実家に行かないようにしているし、母親からもとくに何も言つてこないのが最近はずっかり忘れていた。「でも、それを知つたからどうとかつていうわけではないんですよ」

「そうですね。ところで」

いったん言葉を切つて、龍之介は声のトーンを一音下げた。

「さっきの返事をもらつていませんが」

今までの会話は一切無視ですか。

頬とこめかみがひきつるのを感じながら、

「お断りします」

きつぱりと、これ以上ないくらいにはっきりと言つてやった。

「今日はお疲れ様でした。失礼します」

龍之介が何か言う前に、あたしはそう言つて会釈をするとアパートに走つた。

後輩からの誘い

重くため息を吐いて目の前の扉を見つめた。

結局一睡もできなかった。

それもこれも鈴木龍之介、あの男のせいだ。

あたしはただ普通に社会生活を送りたいだけなのに、いきなり「結婚してください」だなんて。からかっているに決まってる。気に入ればきつと馬鹿を見るに違いないのにどうしても頭から離れない。だって異性に告白されたのなんて生まれて初めてなもの。

いや待て、落ち着け、あたし。

気にしなればいいんだ。普通に。あくまでいつもどおりに過ぐせばいい、はず。

だからこの扉をあけることにそんなに躊躇う必要はないんだ。

気合いを入れて扉を開き、そつと中をうかがう。

よし、いない。ほつと胸をなでおろした時、

「あれ、どうしたの？」

背後から吉井さんの陽気な声がして思わず飛び上がった。

「い、いえ。なんでもないです」

おはようございます、とごまかして事務所に入ったところで会いたくない相手の顔とぶつかる。

「あ、龍くん、おはよう」

「おはようございます」

たつたそれだけ。

挨拶だけしてさつさと自分の仕事を始める。

あたしなんて視界に入っていないような、気にもしていないような態度で。

昨夜のアレはやっぱり単なる冗談ですか。冗談にしても何かしらフオローがあってもいいと思うんだけど。それともあたしが考えすぎているだけなのか。

なんだろう、このもやもやした感覚。

「怖い顔して、どうしたの？」

「え、や。なんでもないですよ。大丈夫です」

慌ててそう取り繕ってロッカー室に向かった。

夕方、アパートの階段を上るあたしの頭の中はぐっちゃぐちゃで、正直、泣きたいような気分だった。

昨日の今日で、なんでもあも平然としていられるのか。こっちはいろいろ考えて頭パンク寸前なのに信じられない。

というかなんであたしがこんなにイライラしなきゃいけないのよ。もう、今日はお風呂入ってすぐ寝よう、と思っていた。

階段を登りきったところで足を止めたのは、部屋のドアの足元に人影があったから。

「せんぱい」

立ち尽くしたあたしを認めて座り込んでいた千紗が駆け寄ってくる。

「ちょっと、大丈夫？」

と聞いたのは、千紗の臉が赤くはれているように見えたから。そしてそれは見間違いじゃなかった。

「振られちゃいました」

「は？ あんたつい最近彼氏できたって言ってなかったっけ」

「そうです、その彼氏に振られました」

そう言っ子子供のように泣き出す。

ちょっと待って。いくらなんでもここでそんなに泣かれると近所迷惑だから。

「ええと、とりあえずうちに入ろう。それから話聞くから」

しゃくりあげる千紗を抱え込むようにして部屋の鍵を開けて入ると奥のソファに座らせる。

千紗はしばらく泣き続けてちょっと落ち着いたのか、渡したタオル

で顔を拭いてポツリポツリと話しました。

「今日、彼氏とデートでどこに行こうかって話になって、映画を見に行ったんです」

千紗の話を聞きながらコーヒーを淹れる。コーヒー粉にお湯を注ぐとふんわりと香ばしい香りが立ち上った。

「見終わって、じゃあ何しようかってことになって、うちに来たいって彼氏が言いだして」

部屋を見た彼氏が千紗の少女趣味を理解できなかった、ということらしい。

それってなんというか。

「理解力のない男だね」

「やっぱりそう思います？」

湯気の立つマグカップからコーヒーをすすって千紗が言う。

「しかも顔が好みだったから付き合ってたけど、ちょっとイメージと違ったから別れるって勝手過ぎませんか？ あたしの顔しか好きじゃなかったのかって感じで」

「あー、まあ、ねえ」

しまった、なんかまたこの子のスイッチを押したかも。

「なんで男の人って顔とか外見でばかり選ぶんでしょう。もうちょつと中身も見てほしいのに」

「う、うーん、そう、かな」

「そうですよ。今まで付き合った男全員同じこと言うんですもん。

『君とは趣味が合わない』って。合わせる必要はないから、理解してくれれば十分なのに」

「あー、それはわかるかも」

確かに彼氏と同じ趣味を持つ必要はないと思う。というか、趣味くらいは好きにさせてほしい。……まあ、この子の趣味はまた別問題かもしれないけど。

「っていうことで、先輩、合コンしましょう」

「は？ なんてそういっ話になるの」

もしかしてもう失恋から立ち直ったとか？

それとも別に失恋の痛手なんてたいしたことなくて、単に話たかっただけなのかしら。

千紗は唇を突き出して、

「失恋の悲しみは新しい恋で忘れるんです。だから合コン行きましようよ」

「いや、あたしは別に失恋とかしてないし……」

「だって先輩、恋してないじゃないですか。恋しましょうよ、絶対楽しいですって！」

「楽しいのかしらねえ」

そうは思えないのはあたしが屈折しているだけなんだろうか。

なんだかなあ。今まで恋愛と無縁で生活してきたからか、相手に合わせるっていうのがどうも面倒臭い気がするんだけど。

「それに二十も半ばを過ぎて処女だなんて、今の時代あり得ません」

「ほっといて」

軽く嘆息すると、ちょっと肩をすくめて見せた。

「わかったわよ。行けばいいんでしょ、合コンに行けば」

意地を張っても千紗は絶対に折れないだろう。

合コンは面倒だけど、飲み会と思えばなんとということもない。

「やった。じゃあ早速メンツを集めますね。楽しみにしててください」

グッと親指を立てる千紗。

「いい出逢いがあるといいですね」

「……お互いにね」

あたしは、力なく笑ってコーヒーを飲みほした。

甘い檸檬にブランデー

琥珀の液を口に流し込んで思案する。

どうやってここから抜け出そうか。

レモンと砂糖のおかげでびっくりするほど飲みやすくなったブランデーが喉を滑り落ちる感覚に、一瞬だけ周りの喧騒から解放される。

千紗の提案で合コンに参加したはいいけど、予想通りの展開だった。

もともとあんまり大騒ぎする方じゃないし、人見知りとまでは行かなくても初対面で会話を弾ませるほどの機転もない。そうすると自然と人の会話の輪から外れていく。

特別出逢いを求めているわけではなし、まあいいかと食事に集中していると急に話を振られたりするから油断がならない。

さて、どうしようか。

普通に帰ると言えば、楽しそうなほかの人たちに水を差してしまおうし、勝手に帰れば食べ逃げになるし、困ったわ。

空になったグラスを弄っていると、ドリンクメニューが差し出された。

「先輩、飲んでますう？」

千紗だ。いつもより一割増しの睫毛をしばたかせて甘えるように言う。化粧だけでなく服装も気合い十分、大胆に開いた胸元からわずかに谷間をのぞかせて、この合コンにかける意気込みを感じさせた。

その千紗からメニューを受け取ると視線を落とす。

正直もう飲みそうにないんだけど。焼酎はダメ、ウイスキーもよろしくない、梅酒も少々控えめに、とあらかじめ千紗に念を押されたから、仕方なくカクテルを数杯飲んだら慣れないもんだからあつという間に酔った。傍目にはわからないだろうけど、ちよつと眼

がちらついできているからこれ以上は飲まない方がいい。

「あ、これかわいい。どうですか」

と指を差したのはフルーツが盛られたカクテルの写真。

「いやちよつとあたし今は……」

休憩させてという間もなく勝手に頼まれた。

どん、と置かれたグラスの色は透明度の高いブラウン。これでもかというくらいに盛られたフルーツは南国のものばかり。勧められるままに一口飲めば予想通りのトロピカル風味。でも後口からすると、結構アルコールきつそう。

「あ、おいしい。あたしも頼もうつと」

一口飲んだ千紗が嬉々として注文した。

仕方なくカクテルを飲んでいると、携帯が鳴った。着信の名前に見て見ぬふりをしたい衝動に駆られるが、ぐつとこらえて電話ボタンを押すと椅子から立ち上がり比較的静かな化粧室に向かう。

「はい、山田です」

『お疲れ様です、鈴木です』

電話越しの口調は相変わらずそっけない。吉田さんみたいなテンションでも困るけど。

『ちよつと困ったことがあります』

そう言う口調が全然困ったように思えないんだけど、それは気のせいかしら。

「何かありましたか？」

『見積書が一枚見当たらないんです』

「……え？」

見積書。それがあたしとどう関係があるんだろう。

そんな考えが口に出たわけでもないと思うけど、龍之介は淡々と続ける。

『今日コピーを取ってもらった書類の中にあつたはずなんですが、ないんです。明日の朝一で持っていくものなのでないと困るんです』

『よ』

それってもしかたなくてもあたしのせいってこと？

「あたし捨てたりしてないですよ」

『でも無いものはないんです。そして無いと非常に困るんです』

電話越しにとため息を吐かれ、酔った勢いもあって一気に頭に血が上った。

「わかりました。今から事務所に行って探します！」

そう言って返事も聞かずに通話を切ると、テーブルに戻った。

「ごめん、千紗。仕事でトラブルがあつて戻らなきゃいけなくなつたから帰るわ」

「ええー、なんでですかあ」

「ごめん。後で払うから、立て替えておいて」

じゃあと鞆を手にふらふらと出口に向かった。

最高の落とし穴

店を出るとまとわりつくような熱気が身を包む。自覚していた以上に酔っていたらしい。ふらふらと歩道を数歩進んだところでいきなり腕を掴まれた。反射的にそつちを向いて見知った顔を見つけると自分の記憶が飛んでるのかと一瞬思った。

でも視界に飛び込んでくるのは目に痛いネオンの光で、どう考えでも事務所の近くではない。

どう言おうかとちよつと迷って出た言葉は、

「書類、見つかりました？」

と首を傾げた。

いや別に愛想を振りまいているつもりじゃなく、単に酔っ払ったせいで頭が重たいからなんだけど相手はどう思ったかちよつと眉を上げた、ように見えた。

そのまま何言わずに腕を引かれて歩き出す。

千鳥足でついていくあたしの頭の中はハテナマークが飛び交っていた。今の状況は一体なんだろう。あたしはどこに連れて行かれるんだろうか。

「あの、書類は」

「嘘です」

龍之介は足を止めてこちらを振り返った。

「書類の話は嘘です。そもそも明日は日曜ですよ」

酔いの回った頭でその言葉を理解するのにたっぷり五秒はかかった。

理解したら、なんでそんな嘘をついたのかとかそもそもなんで龍之介がここにいるんだらうとか疑問がわいてきてぐるぐると頭の中を回りだす。そうするうちにだんだんと世界が回っているような感覚を覚えて龍之介の腕を掴んだ。揺れる地面と連動するように胃の内容物が攪拌されて今にも逆流しそうで。

「……気持ち悪い」
それだけ言うのが精いっぱいだった。

朝起きたらホテルの一室で知らない男が隣に寝ていたとか、そういう始まり方の物語ってけっこうよく見かける。現実にはあり得ないシチュエーションだから重宝されるんだろうか。

だからこれもきつと夢だ。

目が覚めたらいつものベッドで、化粧も落とさず寝たからだるい身体を引きずってシャワーを浴びに行くんだ。だから起きよう。

三つ数えてゆっくりと瞼を上げる。カーテン越しの日差しが目に突き刺さって痛みを覚えたけど、それにこらえて開けた瞳に映るのはどう考えても龍之介の顔に見える。

おかしい。

あたしは夢を見ているんじゃないの？ それとも起きたっていう今の状況がまだ夢の中なのか。

重たい瞼を必死で持ち上げて考えていたら、龍之介と目が合った。細めた瞳にうすら寒いものを感じて反射的に身を引いた拍子にベッドから落ち、したたかに頭をぶつけた。

痛い、なんてもんじゃない。目の前に星が散って、二日酔いの頭がぐわんぐわん揺れた。

しかも人が悶絶している様を見て嘔き出す男はいるし。
最悪だ。

「そんなにおかしいですか」

睨みつけてやると、龍之介は笑いをおさめると肘枕をしてあたしを見下ろす。

「いい眺めですね」

その言葉につられるように視線を下したとたんに顔に血が上るのがわかった。

気が付いたらはぎ取ったベッドのシーツを頭から被っていた。シー

ツの下はほぼ素っ裸。かろうじて下着を着けている状態で、なんでもこんな格好をしているのか必死で記憶をたどる。この状況はもしかしてなくてもアレですか。使い古された恋愛小説の再現ですか。

いや、まだそうと決まったわけじゃない。気は進まないけど一応確認をしないと。

心の中で気合いを入れてシーツから顔を出した先で龍之介の視線とぶつかって決心が鈍った

いやいや、ここでくじけてなるものか。

「昨夜のこと、ですけど」

なるべく目を合わせないように視線を下に向ける。というか、なんで上半身裸で寝てるんだ、この男は。目のやり場に困るんだけど。

「覚えていませんか？」

「ええまあ」

覚えてないから聞いているんだと言いたい。だけどここは我慢だ。じっと考え込んでいるような沈黙が長い。重たげなため息が恐怖をあおった。

「あのあと、アナタは気分が悪くて吐きそうだと言ったとたんに吐いて、そのまま気を失ったんです。そのまま放置するわけにもいかず、そこまでタクシーで帰ってきたんですが、アナタは起きないので仕方なくうちに連れてきたんです」

「あの、じゃああたしの服は？」

「失礼だとは思いましたが、汚れていたので洗いました」

もう乾いていると思うので取ってきます、と浴室に向かう龍之介の背を眺めてちよつとほつとした。

どうやら最悪の事態は免れたらしい。よかった、相手が常識人でほんのり温もりが残る服を着るとお礼を言っただけでマンションを出た。朝食でもと言われたけどそこまで迷惑をかけられないし、食欲もない。それよりも二日酔いの身体を休めたかった。

アパートに帰ってシャワーを浴び、何気なく鏡を見る。

「なに、これ」

鎖骨の下あたりに一か所と胸元に一か所、赤い点が浮いていた。虫さされかと思つて触つてみるけど、特にはれている気配はない。鏡に近づいてよく観察してみると、内出血しているようにも見えた。これってアレよね。たぶん、いやおそろく、あたしの認識が正しければだけどいわゆるキスマークつてやつだ。

一夜明けて

「キス マーク」？強くキスをされたあとにできる、あざ。？手紙などにしるした唇の形の口紅の跡。 大辞泉。

重い頭を必死に回転させて昨夜の記憶をたどってみても、あたしの脳みそからは何も出てこなかった。せいぜい龍之介から電話がかかってきて店を出たあたりまでしか思い出せず、そのあと何があったのか、どんな話をしたのかがさっぱりで、なんであんなったのか全くもって不明だ。

本当は直接龍之介に聞くのが一番手っ取り早いのはわかっている。でも一応介抱してもらったらしいので、それを疑うのは気が引けるいや、でも胸元のこれについては何も言わなかったし。本当は何かあったのかも知れないし。いやいや、もしかしたらキスマークって言うのがあたしの勘違いで、あんがい知らないうちにどこかでぶつけたとか。

一日中ぐずぐず考えて、結局本人に聞いてみることに落ち着いた。はず、なのに。

「おはようございます」

勢いよく事務所のドアを開けた先に龍之介の姿を見つけて、急に逃げ出したくなった。理性でなんとか踏みとどまると平静を装いつつ、いつものようにロッカーに荷物をしまい、コーヒーを淹れる。

問題はどのタイミングで切り出すかだ。何かの話題にかこつけて振った方がいいのか、ストレートに聞いてしまうか、どっちが自然なんだろう。

「コーヒー豆の缶をもてあそびながら考えていたら、

「グッ、モーニン、エブリワン！」

近所迷惑なくらいの吉井さんの声に思わず缶を取り落としそうになった。蓋をしていたから豆がこぼれることはなかったけど、落と

していたらきつと中身をぶちまけたにちがいない。

「花ちゃん、おはよう。あれっ、元気ないね？」

「おはようございます。そんなことないですよ、元気です」

にこやかな彼のテンションと比べれば、世の大半のサラリーマンは元気がないと思う。

淹れたてのコーヒーをカップに注いで一つを吉井さんに渡し、もうひとつを龍之介の机に置いたところで龍之介と目が合った。

反射的に顔をそらしてしまっただけからまずいと思った。こんなの、意識してるって言うてるようなものじゃない。

でも一度そらしてしまっただけ視線をもう一度合わせることはできなかったのはきつとあたしのせいだけじゃない。斜め右から向けられる視線がうすら寒くて、冷や汗が滲み出る気がした。

「ありがとうございます」

「いえ。どういたしまして」

震えそうになる喉を必死でなだめて声を出す。もう何があったのかなんて聞けない。それよりも、あたしが変だ。龍之介の顔がまともに見れない。

「顔色悪いよ。本当に大丈夫？」

吉井さんが心配そうに聞いてくる。

「だ、大丈夫ですよ。ちよっと二日酔い気味で」

なるべく明るく言って、コーヒーを啜った。

大丈夫。じゃ、ないかもしれない。

あたしがおかしい。かもしれない。

墓穴を掘る

薄暗い帰り道を龍之介と並んで歩く。お互い歩いている間は終始無言。

この状況があたしの意思ではないことを強く主張する。

「山田さんはバス通勤だったわよね？」

発端はまどかさんの終業間際のこの一言。

「そうですね、どうかしました？」

まさか交通費が全く出ないと言われるんじゃないだろうかとドキキしながら答える。契約当初の話では交通費も上限はあるものの支給されるはずだった。

あたしの危惧に気付いていない様子でまどかさんは一人で頷いて、「ここからバス停まで鈴木君に送ってもらいなさいな」

交通費が出ないわけではないらしい。よかった。ちょっとほっとしたところでまどかさんの話の意味を考える。

誰に、なんですって。

「えっと……」

「昨日この近くで痴漢が出たんですって。回覧で回ってきてね、山田さんも年頃の娘さんだから防犯のためにしばらくは鈴木君に送ってもらおうと思うの」

言うだけ言って、まどかさんは龍之介に事後承諾をとる。

ちょっと待ってとあたしは心の中で叫んだ。痴漢が出たから防犯対策っていいのはいいとしても、なんでその相手が龍之介なのか。なんで吉井さんじゃないのか。いや、吉井さんは無理だわ。今が大詰めの時期だから。……って、そうじゃなくて。

「いえ、大丈夫です。あたしこっぴどく見えて結構逃げ足速いんですよ」

だからこれ以上あの男と一緒に行動させないでください。

けれどまどかさんは決して首を縦に振らない。

「そんなこと言って、もし痴漢に遭ったらどうするの。鈴木君も、切りのいいところで今日は上がりなさい」

じろりと睨めつけられて何も言えなくなり、結局言われるがままに龍之介と一緒に帰るはめになった。

仕事中もそうだけど、二人きりって気まずい。会話をすれば少しは紛れるのかもしれないが、今のあたしに気のきいた会話なんて出来そうもない。この間のことがあったて以来、まともに龍之介の顔を見ることができないでいるのだから。それにバスに乗っている間なら何とか携帯をのぞいたりして間がもてるけど、降りてしまえば携帯を見ながら歩くななんて芸当ができるわけもない。

どうしたものかしらと考えながらコンビ二に立ち寄るとそこで見知った顔に出くわした。

「先輩、お疲れ様です」

千紗だ。仕事帰りのはずなのにばつちりメイクと気合いの入った服装は同性ながら尊敬するわ。そういえば彼氏が出来たとか言っていた気がするから、もしかしたらこれからデートだったりするのかもしれない。

「先輩に会えてよかったです。ちょうどメールを送ろうと思ってたんですよ」

「何か用事だった？」

「はい。先輩、来週の日曜って予定入ってます？」

なんとなく引つかかるものを感じて考えるそぶりを見せると慎重に口を開く。

「来週の日曜って花火大会の日ね。何かあるの？」

「彼氏と彼氏の友だちと一緒にバーベキューをしようって話になってるので、先輩もどうかと思って」

よかつたら先輩も一緒に、という千紗の好意はありがたいんだけど確か千紗の彼氏って合コンにいた人だったはずで、その友だちということとはきつとこの間と同じテンションで盛り上がるに違いない。それに合わせるのには昼間からは厳しいだろう。でもせっかく誘っ

てくれているのを無下に断るのも申し訳なくて、どうしようかとわずかの間考える。

「この間の合コンにきてた子で先輩のことが気になるって人がいるんですよ。だからぜひ一緒に行きませんか」

「えーと」

やばい。

この調子だとちょっと気が乗らないからって理由じゃ断れない。もっとも有効かつ穏便な理由を探さないと。

ぐるぐると脳みそを回転させながら曖昧に返事をしていたあたしの視界の隅に龍之介が映り、とつさにその腕を掴んだ。

「ちようどその日花火を見に行く約束してるんだわ。ごめんね、また誘ってよ」

そこで初めて存在に気付いたような顔で千紗は龍之介を見上げて、一拍のちにしたり顔で頷いた。

「なーんだ、そういうことだったんですね。それなら仕方ないです」
あっさり引き下がると彼氏が待っているといって駐車場を横切っていた。

ほっとしたのもつかの間、横からの視線に身を震わせる。

「……すみません」

なにを言われるかとびくびくしながらとりあえず謝る。返ってきたのは無言と嘆息。

「浴衣、持ってますか？」

浴衣？

「持ってますけど、それがなにか？」

千紗の誘いとは全く別物の嫌な予感がする。

「それじゃあ、花火大会に着てきてください」

「はあ？」

「約束していたんですね、花火を見に行く」

思わず見上げた龍之介はいつぞや見たとびきり恐ろしくて極上の笑顔を浮かべていた。

「山田さんの浴衣姿を楽しみにしていますよ」
いろいろと、と付け加えたその男の言葉に心底縮みあがった。

浴衣と花火と腹の虫

浴衣姿を楽しみにしていますよ。

極上の笑顔は、そのまま悪魔のほほ笑みに見えた。

その笑顔の主は、今、あたしの目の前で冷めた目をしてこちらを眺めている。

「何か？」

文句でもあるかと言外に告げてやると、龍之介は少しも表情を変えることなく、

「浴衣ではないんですね」

ワンピース姿のあたしを見下ろしてひとり言のように低くつぶやいた。

誰が浴衣なんぞ着ますか。

いや、始めは着ようかと思ったのだ。まったく悩まなかったと言えは嘘になる。

一応は浴衣を引っ張り出しはした。まだ学生だったころ、暇にあかせて縫った浴衣である。緑の地に黄色のケシの花と赤蜻蛉の染め抜かれた柄が気に入って、親に頼みこんで買ってもらった反物を二年越しで縫いあげたのだ。今でも気に入っているその浴衣を年に何度も着る機会がないから本当は着たかったんだけど、なんとなく、着ていかないほうがいい気がしてやめた。

「実家に取りに行く時間がなかったんです」

「そうですか」

信じているのか微妙な答えである。

「残念ですね」

という一言がなんとなく刺さった。

本心から言っているのかしら。

いやいや、そんなわけではない。

「何か？」

龍之介が眼鏡の奥の瞳を意地悪そうに細めるのを見て、なんとなく照れくさくなって視線を逸らした。

「いえ、別に。……伊達眼鏡がよくお似合いですね」

黒縁の大きすぎない眼鏡は最近流行りのデザインで、いかにも胡散臭そうな感じがこの男に似合っている。

「それはどうもありがとうございます。伊達ではないですけど」

そろそろ行きませんか、と妙に親切に言うと龍之介は歩き出した。斜め後ろをついて歩きながらその横顔を盗み見る。

仕事では眼鏡姿を見たことなかったから伊達だと思ったけど、じやあ普段はコンタクトなのかしら。目薬も差せないあたしにとってコンタクトを入れるなんて考えただけで恐ろしい。

そのまま会話は立ち消えになり、無言になってしまった。

花火大会の会場は毎年のことながらすごい人の数で、歩行者天国になった道路はただ歩くことで精いっぱい。歩道にはたこ焼きや焼きそばなどの露店が並び、打ち上げが始まるまでに空腹を満たしておこうというのか、行列ができている。その状況のなか、龍之介の背を追って歩くのはなかなか難儀だった。

この辺でどうでしょうと龍之介が立ち止まって振り返ったときには、歩き疲れてへとへとになっていた。おまけに履き慣れないサンダルのせいで足が痛いし。

人の波から少し外れたその場所は花火が打ち上げられる川沿いではあるもののちょっとした公園になっているらしく小さなベンチとブランコ、それに柳が数本、川に向かって植えられており視界があまり良くない。きつとそのせいで人がまばらなんだろうけど、こんなところでちゃんと花火が見えるんだろうか。

「そろそろ始まりますね」

時計を見て龍之介が言う。

間をおかずにヒューツという音が聞こえ、次いで破裂音とともに漆黒の空に炎の花が咲く。

こんな場所で花火見物なんて思っていたけれど、打ち上げ場所からそう離れていないからなのか、花火は柳の木よりも高い場所に見えた。ここつてもしかして花火見物の穴場なのかもしれない。

全身を打ちつけるような音と赤青黄、とりどりの色が次々と夜空を染める様子にしばらくは言葉も忘れて見入っていた。

ふいに肩を叩かれて龍之介の方を見ると何か言っているようだ。ただ、花火の音にかき消されて全く聞こえない。首をかしげると顔を近づけてきて、

「花火、お好きなんですか？」

と聞いてくる。

「好きですよ」

むしろ嫌いな人間に会ったことがないんですけど。花火嫌いな人っているのかしら。いや、きめつけはよくない。案外いるのかもしれない。

「特に好きなのは柳で、あ、これです」

ドン、という音とともに咲いた星が尾を引いて広がりそのまま落ちていく、いかにも日本の花火という感じがして好きなのだ。

そうしてまた花火に視線を戻そうとして、妙に龍之介の顔が近いことに気付く。というか、なんか近づいてません？

「……なんですか、この手？」

それはこっちの台詞だ。

吐息がかかるほどの距離で龍之介が半眼になっている。

「だ、だって、何するつもりですか」

かろうじて手でさえぎっているけれども、そうしなかつたら、きっと、キスとかできちゃう距離ですよ。

「何するって、キスしようと思ったんですが」

「きッ……!!」

一気に顔に血が上るのがわかった。夜でよかった。たぶん今、あ

たしの顔はリンゴより赤い。

「なっ、なんでそんなことっ。何考えてるんですか！」

「同じことを考えていると思ったんですけどね、まだ早かったですか」

これ以上距離を縮めることも開けることもせず、龍之介はひとり言のように言う。そうして遮っているあたしの手を掴むと掌に唇を押しつける。柔らかく温かい感触に体中の血液が逆流しそうだ。

あたしが黙っているのをいいことに龍之介の唇は掌から指先に移動するとその一本をくわえて軽く歯を立てる。

そのとたん、背中に電気が走った気がした。動悸が激しくなつて息苦しい。離してほしいのになんと言ったらいいか分からなくてただなすがままにされていたとき、救いの神が降りてきた。

ぐう、と響く重低音。

その音に龍之介は動きを止めると訝しげな視線を向けてくる。

恥ずかしい。けどでかした、あたしの腹の虫。

「すみません、お腹すいてきたので何か買ってきます」

龍之介の返事も聞かずに駆け出した。

露店の並ぶ通りまで出てちよつと深呼吸をする。まだ動悸が打っている。

び、びっくりした。あんな状況、生まれて初めてでどうしていいかわからない。

とりあえず落ち着こう。それで何か食べて今後の対策を考えよう。来た道を戻るように歩きながら自分に言い聞かせた。

断続的に明るく光る夜空を見て、そう言えばまだ花火の最中だったっけと思に至る。

ときおり上がる歓声をよそに、露店をぶらぶら見て回る。結局買ったのはたこ焼きとあんず飴。花火を見ていた店のおばさんにお願いでござわさ焼いてもらった熱々のたこ焼きを手に、重い足取りで公園に戻る。

本当は行きたくない。というか顔を合わせる勇気がございません。

でもなぜか足が向くのよ。

だってこのまま一人で帰ったら、明日からの仕事で余計顔合わせづらいじゃない。別に気にしてないって態度をとってればきつと何とかなると思うのよね。

そう結論づけて視線を上げる。

ちょうど花火が上がった瞬間で、照らされた公園に龍之介がいた。赤い浴衣の女の人と一緒に。

一緒というか、あれはたぶん、キス、してた。

涙の理由

人込みをすり抜けるように足早に歩く。

花火なんて、もうどうでもよかった。断続的に上がっては視界を照らしてくれるけど、そんなことに意識を割ける余裕がない。

頭の中はさつき目にした光景を理解するので精いっぱいだった。キスしてた。

はつきりと見たわけではないけど、あれは絶対そうだ。

思い出すとなぜだろう、もやもやと胸に不快感を覚える。

ついさつきあたしにキスしようとしていたくせに、なにほかの人としちゃってるんですか。結局誰でもいいんだらうか。いいんだらうな。

じわり、とふいに視界がゆがむ。

ここで泣いたらだめだ。

動悸を抑えるようにゆっくりと深呼吸を繰り返し、大丈夫と言い聞かせる。大丈夫。別にあたしが泣くようなことじゃない。そもそも龍之介はただの同僚なんだから、誰とキスしようが付き合おうがあたしには関係ない。

関係ないのだ。だから、あたしが傷つく必要は、ない。

ドン、とひととき大きく響く花火の音。それを合図に続けざまに数十発上がり、夜空を染め上げた。すべてが終わった後の余韻を味わうような間をおいて、そこかしこから拍手がわきあがる。

そうして帰り支度を始める人たちを縁石に腰かけたままぼんやりと眺めていると、また瞼が熱くなってくる。

なんでだろう。

本当はもう少し楽しむはずだったのに今すごく惨めな気分なのは、通行の邪魔にならないよう膝を抱くような格好で携帯を見ているふりをしながら息を吸う。しばらくそのまま人の目をやりすごし、混雑していた道路の人の気配がまばらになった頃合いを見計らって

顔を上げた。

人のいなくなった道路はがらんとしていて、ポツンポツンと街灯がさみしそうに並んでいる。そのほかは店じまいをしている露店の明かりだけで、さっきまでの人だかりはどこにいったんだろうと不思議になる。

帰らなきや、と思うけどどうしても帰る気になれなくて縁石に座ったままぼんやりとしていると、花火に照らされて見た光景が浮かんできて、ひくりと喉が震えた。

だめだ。

歯を食いしばってこらえようとしていたのに、瞬きの拍子に転がり落ちるともう止められなかった。次から次に湧いて出る涙を誰にも見られたくなくてうつむいて泣いた。

ふと、人の気配が近くにある気がして顔を上げると龍之介が立っていた。不機嫌そうな様子にあたしが顔を逸らすと、さらに不機嫌そうに息を吐いた。

「なかなか戻ってこないと思ったら。こんなところで何をしていますか」

何をしているのか。

それはあたしの台詞だ。何事もなかったかの様な顔をして、あたしの前に立っているこの男。

人がいない間に何をしていたのか聞いてみようか。そう思って口を開いたとたんに涙がこぼれたせいで聞けなかった。

うつむいて鼻をすするあたしの様子が気になったのか、龍之介は膝をつくとこちらを覗き込んでくる。

「……泣いているんですか？」

なぜ、と言外に聞いてくる龍之介から逃げるようにうつむく。

「なんでもありません」

「なんでもないようには見えませんが」

向けられる視線に圧力を感じて膝の上で拳を握る。それから鼻をすすって、

「サンダルで、靴ずれをおこして、い、痛くて」

「靴ずれ……?」

つぶやく龍之介の視線から逃げるように足をワンピースの裾で隠す。

「歩けますか?」

至極冷静な口調で龍之介が言うので、思わず顔を上げてしまった。

「えっと……」

「歩けますか?」

もう一度、まっすぐあたしを見てそう聞いてくる。

もしかして、心配してくれているのだろうか。靴ずれなんて見え見えの言い訳を信じているとか?

黙り込んでその顔を見つめていると、

「歩けないようだったら、その通りまで背負っていきますよ」

通りまで出たらタクシーで帰りましようという。

「大丈夫です。歩けます」

タクシーを使うのは別にかまわないけれど、おんぶされるのは「めんだ。

「でも、泣くほど痛いんでしょう?」

からかわれているような気がするのは気のせいだろうか。気のせいじゃないかもしれない。

「大丈夫です」

繰り返すと立ち上がる。そうしてしゃがんだままの龍之介を見下ろした。

涙はすっかり引いていた。久々に泣いたせいで少し頭痛がするけれど、もう大丈夫だ。

少し間をおいて立ち上がった龍之介はまじまじとあたしの顔を見て、

「それで、なんで泣いていたんですか?」

「だから靴ずれをおこしたんです」

「それだけですか?」

龍之介が目を細めてこちらを見る。

嘘を見透かされているような視線に居心地の悪さを感じてついでに目を逸らしてしまった。

なんで泣いたのか、正直なところよくわからない。別に泣くほどのことではなかった気がするけど、なんでだろう。

ただ一つわかっているのは、

「……鈴木さんなんて嫌いです」

言葉の真意

こんなところでこんなこと、言わなきゃよかった。せめて別れ際とかだつたら言い逃げもできたのに、これじゃあ気まずいだけだ。

後悔の念にさいなまれつつ、あたしは龍之介の反応がこわくて足元に落とした視線を上げることができずに唇を噛みしめたまま、じつと息をひそめる。

たっぷり十秒は間をおいて龍之介がため息を吐く。

「そうですか」

たつたひとこと。それだけつぶやいて黙り込んだ。

重苦しい沈黙が落ちるなか、あたしはぎゅっと手を握りこむ。

それだけ？

肩すかしをくらったような気分になって、別にドラマのような展開を望んでいたわけじゃないはずなのに、なんでこんなにシヨックなんだろう。

じわり、とこみあげてくるものを感じて拳に力を込める。

何を期待していたんだろう。

もつと冷たくされると思ったのか、怒り出すと思ったのか、それとももつとほかのことを期待していたのか、それすらわからない。

その、わからないことがもどかしくて悔しくて、これからどうしたらいいのかわからなくてよけいに泣きたくなくなる。

いや、だめだ。これ以上この男の前で泣きたくはない。

もうひとこと、なんでもいいから言ってくれれば、きっと気持ちも切り換えることができるだろうに、なんで何も言わないのよ。

奥歯をかみしめて睨みつけてやるうかと上げた視界の端にふいに光が見えた。と思うと同時に手を引っ張られて龍之介の腕の中に収まっていた。交通規制が解けたらしく、車が一台、結構なスピードで通り過ぎるのを音で感じた。遅れて風が追ってきて、ふわりと香水が鼻をくすぐると急に動悸が激しくなる。

なんでこういうことするんだろう。あたしは嫌いだって言ったのに。

動悸とともに息まで苦しくなってきた、突っぱねるようにして龍之介の腕から逃れると早足で歩きだす。

お互い黙り込んだままアパートが見えてきたところで後ろを歩く龍之介が声をかけてきた。

「……………なんですか？」

そろそろと振り返る。このパターンはなんだか嫌な予感がする。

見上げた龍之介の表情は眼鏡のせいではつきりとはわからないけど、たぶん無表情なんだろう。

「あなたは俺のことが嫌いだと言われたけど」

じつとこちらを見つめて、低く、つぶやくように言う。

「でも俺は、山田さんのこと好きですよ」

一瞬、息が止まった。

頭が、考えることを拒否してしまったように固まったまま凝視する先で、龍之介はそれじゃあ、とわずかに会釈をしてマンションに向かっていった。

ヲトメゴコロ

ころりと寝がえりをうつ。その拍子に瞼に載せていた保冷剤が転げ落ちた。ほのかな明かりを頼りに手探りで保冷剤を探し出し、何度目か知れないため息を吐いた。

眠れない。

今日　　というか日付が変わったから昨日になるのかしら　　龍
之介に告白されました。

いや、別に深い意味はないかもしれないし。好きって言っても、人間としてとか、性格がとか、同僚として、とかいろいろ種類があるうちの一つで、特に気にするほどのことじゃないかもしれないし。うん、そう。きつとそうだ。

だからもう寝よう。

きつく目を閉じて深呼吸を三回。何も考えないように心がけながら静かに眠りに落ちていく様をイメージし、一分もしないところでききなり龍之介の顔が浮かんできて落ち着きかけた思考に波紋が広がる。

だめだ、眠れない。

どんなに努力をしても聞いてしまった言葉は脳みそに勝手にインプットされて、あたしの意味とは関係なしに繰り返しこだまする。なんとかして記憶を消すことができないものかしら。今だったら有り金はたいてでも飛びつくの。唐突にそんなことを考えつつ、ひんやりとした保冷剤を顔に載せた。

それでも、どんなにがんばったところでなかなか寝付けそうにはなかった。

「グッ、モーニング……」

勢いよくドアを開けた吉井さんの声が尻すぼみに消えていく。原

因は間違いなくこのギスギスした空気だ。

「おはようございます」

と挨拶を返したあたしの方にそそくさと寄ってくると、チラリと事務所の奥に視線を向けてから、

「……なんか、空気が悪いね」

空気が悪いのは間違いなく龍之介のせいだ。どういうわけか、朝出勤してからずっと機嫌が悪い。

とはまさか言えないので苦笑いを浮かべた。

すると吉井さんはちよつと考えるそぶりをし、次いで一つ頷くと、

「わかった。何とかしてみるよ」

何とかできるものなんですか。

首をかしげるあたしに向かって親指を力強く立てると、吉井さんはいつもの調子で龍之介に声をかけた。

「龍くん、おはよう。昨日見たよー、花火でデート」

な、なんですってー！

ガツンと頭をぶたれたような気がした。

見られていたなんて、そんなまさか。いやでも、暗くて顔なんてはっきり見えなかっただろうし。でもそれでも龍之介を認識できるくらいならもしかしたらあたしも見られていたんだろうか。見られてたとしたら、どうしよう。なにかうまい言い訳はないかしら。

そうだ。偶然会ったことにしておけばいいわ。吉井さんが龍之介を見たのも偶然なら、あたしと会ったのも偶然ってことにしておけばきつと大丈夫。言い訳は何かなる。

振り向いて口を開こうとしたとき、

「相変わらずリカちゃんとラブラブだねえ」

へ？

りかちゃん？

体感温度、氷点下

誰それ。

振り返ったまま固まったあたしの様子など全く見えていない吉井さんは龍之介に向かってにこやかに話を続ける。

「それにリカちゃんも元氣そうでよかったよ。辞めてから全然顔出さないし、心配してたんだよね」

吉井さんの背中の方こうに見える龍之介の顔は、さっきより一段と冷やかなものになっていった。

「……何の話ですか」

短く聞き返す声も今まで聞いたことがないくらい低く不機嫌そうだ。

しかし吉井さんには龍之介の醸し出す氷点下のオーラが見えていないんだろうか。とくに気にした様子もない。

「またまたあ。昨夜の花火大会の話だよ。赤い浴衣の女の子と一緒にいたでしょう。後ろ姿しか見えなかったけど、あれは絶対リカちゃんだよね」

赤い浴衣ですって。それってつまり、昨夜キスしてたあの女の人が龍之介の彼女ってこと？

彼女がいるくせにあたしに向かって好きとか言ってくるなんて、どんだけ氣が多いのよ。というかそれって浮気相手としてってことだよな。信じられない、ひどくないですか。

龍之介はイラついたようにため息を吐いた。

「人違いです」

「そんな、今更照れなくてもいいじゃない。二人が付き合ってることはみんな知ってるんだし」

世話焼きな親戚のおばちゃんのような口調と仕草で吉井さんはポンポンと龍之介の肩をたたく。

みんなって、あたしは初耳ですが。

「リカとはずいぶん前に別れました」

チラリとあたしの方を一度見て、龍之介は低くそう言った。ちよつと待つて。なんでそこであたしを見るのよ。

「えっ、そうなんだ？ てつきりまだ続いているもんだと思ってた」
じゃああれは人違いかな、とぶつぶつ呟いて、吉井さんは首をか
しげている。

「リカちゃん美人さんだったのに、もつたいないことしたねえ」

へえ、美人の彼女がいたんですね。いや別にいい年なんだし、彼女の一人や二人いてもおかしくはないけどさ。なんとなく胃の上あたりがもやもやしてくる。

これはきつとあれだ。蚊帳の外に置かれているからだ。

気持ちを切り替えようと、勢いよく湯気を吐き始めたやかんの火を止め、まずカップに注ぐと次いでコーヒートを淹れ始める。ゆっくりとお湯を注ぐ手が止まったのは吉井さんの次の一言のせいだ。

「でもなんで別れたの？」

興味津津と言うよりも、話のついでといった口調だった。

あたしは思わず吉井さんの背中に顔を向けて、慌ててコーヒーに視線を戻す。それでも耳だけは二人の会話に集中させる。

龍之介がため息を吐くのを感じた。

「べつに。単に興味がなくなっただけです」

一瞬、やかんの熱湯をぶっかけてやるうかと思った。しなかつたのはかるうじて理性が働いたからだ。衝動は抑えられたけど気持ちはおさまらなかつた。

「それってひどくないですか」

話題の「リカちゃん」をあたしは知らないけど、興味がなくなつたとか、理由になつてない。同じ女としてそんな理由で振られるの
つて許せない。

吉井さんは驚いた顔をして、いきなり会話に入ってきたあたしを
振り返つた。

龍之介は眉間にシワを寄せてこちらを見返している。

「そうですか。今までもたいてい同じパターンだったんですけどね」
「そ……っ」

同じような別れ方をしてきたですって？

怒りに震える左手を握り締めて、

「じゃあなんで付き合っただけですか？」

「べつになんとなく」

しれっと言って龍之介は視線を外した。

信じられない。男の人はなんとなくて付き合えるものなんですか。

「……好きだからとか、そういう動機はないんですか」

すると龍之介はうんざりしたように、

「今更そんなこと。処女じゃあるまいし」

なんですと？

吉井さんの爆弾発言以上の衝撃だった。何を言われたのか理解できなくて、その意味を脳に到達したとき、キレるという感覚がわかった気がした。

「龍くん！」

慌てて吉井さんが割り込んでくる。

「言いすぎだよ。花ちゃん、気にしなくていいからね。ほら、龍くんも謝って！」

必死でなだめようとしてくれる吉井さんの声も言葉として理解できない。

黙り込んだあたしは、どう言い返してやろうかと頭の中でひたすら考えていた。そのわずかの時間のあと、震える息を吐き出すと龍之介に向かって、

「セクハラです」

はじめられたようにこちらを向いた龍之介を睨みつけると淹れかけのコーヒーに意識を戻す。ぬるくなってしまうたコーヒーを温めておいたカップになみなみと注ぐと龍之介の机にドンと置いてやる。

「コーヒーをどうぞ」

嫌味ったらしく笑みを浮かべてそう言うと、もう一度コーヒーを

淹れるべくやかんに水を足した。

先達の識見

「信じられないでしょ！」

と拳をテーブルに叩きつけるとコーヒークップがソーサーとぶつかって小さく悲鳴を上げた。

仕事帰り、前の職場に直行して仕事上がりの千紗を拉致でもする勢いで手近なカフェに連れ込んだのがほんの数十分前。注文だけして怒りにまかせてうっ憤をぶちまけた締め言葉がさっきの台詞だ。千紗はといえば、二杯目のアイステイアのレモンをストローで潰しながらわずかに首を傾げると、それこそ信じられない発言をした。「えーと、つまり、先輩はその人のことが好きなんですね？」

「……はあ？」

思わず語尾が上がる。

「いったい、この話のどこをどう聞いたらそんな結論になるのか。思わずまじまじと千紗の顔を見てしまった。」

「だってそうじゃないですか」

「いや、だってって何よ。」

「同僚の一言にそこまで過敏に反応するってというのは、異性として意識しているからだと思うんです」

考えてみてくださいよ、と千紗はちょっと身を乗り出した。

「まえ、井藤次長にさんざん同じようなこと言われても、先輩は全然気にしてないっていうか、完全にスルーしてたじゃないですか」

「そうだったっけ？」

「そうですね。かわいいとかチューしてやるとかいろいろ。覚えてないんですか？」

「言われてみれば、そういうこともあったかもしれない。」

「で、でも次長はああいう人だし、あれはセクハラっていうよりも単なる冗談でしょう」

「冗談だとしても、気にする人は気にします」

上目づかいに睨まれて、ちょっと居心地が悪くて冷めたコーヒーをすすする。

「で、結論から言うと、井藤次長のセクハラ発言は聞き流せたのに今回はそれができないっていうのは何かあるんじゃないかと」

一瞬、動揺して動きを止めてしまった。

なんでこういうことに鋭いんだ。お見合い相手だったとか、プロポーズされたとか合コンのあとのこととか全く言っていないはずなのに、なんで何もかもばれている気になるんだろう。

「なんにもないわよ？」

不自然に思われないよう目は逸らさずに首を振る。

探るような目つきでこちらをじっと見つめる千紗は、

「アヤシイ」

「だからなんにも」

ない、と言おうとしたとき、千紗の携帯が鳴った。メールだったらしく、携帯を開いてざっと目を通すと返信を打ち出す。パチンと携帯を閉じると、

「嫌よ嫌よも好きのうちって言葉、知ってます？」

どくん、と痛みを感じるほど心臓が跳ね上がる。

「好きと嫌いは紙一重、とも言いますよね。たぶんそれだと思っんですよね、先輩も」

「な、何言ってるのよ。そんなわけないじゃない」

「えー、そうかなあ」

不満そうに口を尖らせる千紗はなおもぶつぶつと呟いてアイステイーを飲み干すと席を立った。

「すみません、彼氏が待ってるので今日はこれで失礼しますね」

せめてものお詫びです、と伝票を抜き取る。

「あ、ごめん。いきなり押し掛けて迷惑だったよね」

予定も何も聞かずにここに連れてきたんだといまさら気付いた。

やばい。もしかしなくとも彼氏とデートの邪魔をしちゃったのかしら。

それを聞いた千紗は歯を見せて笑った。

「約束っていうほどじゃないですから大丈夫ですよ。それに珍しく先輩の恋バナを聞けてよかったです」

「だから恋じゃないって」

「絶対恋です。あたしが保証します！」

がんばってくださいね、と親指を立てて言うと、千紗は会釈をして店を出て行った。

好きと嫌い

茫然として千紗を見送ったあたしの頭の中は疑問符だらけだ。
恋って何よ、恋って。

あたしが龍之介のことを好きだなんて、なんでそんな話になるわけ？

そんなわけあるわけない。あんな失礼極まりない最低男。

……そんな話の流れだったかしら。

考え事をしていたあたしの右腕を誰かが掴んで引つ張る感覚で思案から現実に戻された。ほぼ同時にクラクションの音と光が目の前を通り過ぎる。

「自殺でもする気ですか」

龍之介が怒ったような、でも少し焦ったような声色で言うので、びくりと肩が震えた。

「ちょっと考え事をしていたので。すみません。ありがとうござい
ます」

一応お礼を言いながらなんでここに龍之介がいるのかを考える。
よりもよつてこのタイミングでと、ぐるりと街並みを見渡して理
解する。ぼつぼつと街灯が並んだ見慣れた建物の並びはアパートの
近所のものだ。

あたし、いつの間にかここまで帰ってきたんだろう。考え事をして
いたからか、全く記憶がない。

「赤信号にも気付かないほど何を考えていたんですか？」

「なにつて……」

あなたのことです、とは口が裂けても言えない。そんなの恥ずか
しすぎる。

「べつに、たいしたことじゃありません」

なんとなく気まずくてうつむいて応える。

一拍おいて龍之介が口を開いた。

「今朝は、すみませんでした」

思ってもみなかった言葉に反射的に龍之介を見上げる。その顔は真面目そのもので、とたんにぎくりと心臓が跳ね上がった。

「こちらこそ、むきになってすみませんでした」

言い終わるかどうかのタイミングで信号が変わり、龍之介は歩き出す。

二の腕を掴んでいたはずの龍之介の手がいつの間にかあたしの手を握っていたせいでつられるように踏み出した。

その人のことが好きなんですな。

唐突に千紗の言葉が耳の奥によみがえってきた。

いや、いやいや。違うから。そういうんじゃないから。

頭では否定するのに、握られた手はまるでそこに心臓が移動したかのようにどくどくと脈打ちだす。異常に熱くなった掌が汗ばんでくるのを感じて、つい手を振りほどこうと引つ張った。

「なにか？」

「いえあの、手。手を離してもらえますか。……子供じゃないんですから、一人で歩けます」

「知ってますよ」

「じゃあ……」

「嫌です」

な、なによそれ。

愕然として龍之介の顔を見返すと目が合った。なぜか恥ずかしくなつて視線を少し下げる。振りほどこうとしたせいなのか、龍之介の手に力が入ったのがわかる。

「からかわないでください」

「からかってなんていません」

じゃあさつさと手を離してよ。心の中でそう毒づく。

視線を逸らしていても龍之介がこちらを見ているのはひしひしと感じる。

「じゃあなんで離してくれないんですか」

力を込められているからって決して痛いわけじゃないけど、どう引つ張ってみたところで龍之介の手から逃れることはできなくて。それに自分のものじゃない体温を感じて心臓が痛いくらいにどきどきして、体中の血が沸騰しそうだった。

それなのに龍之介はしれっとした態度なものだからむしろ悔しい。

「好きだからです」

お願いだから世間話でもするみたいに言わないで。告白ってそんなにさらっと言うものじゃないでしょう。

ひととき大きく打った心臓をなだめるために深呼吸して視線を上げる。

「あたしは嫌いだって言いました」

「山田さん」

「な、なんですか？」

心なしかトーンを落とした声で呼びかけられてびくりと身体がすくんだ。何を言われるかと身を固くしてじっと待つけれど、龍之介は何を考えているのかつかの間黙り込んだあと、

「好意と嫌悪は似た感情だっでご存知ですか？」

この男まで、なんで千紗と同じようなことを言い出すの。

「……なにが言いたいんですか」

睨みつけると龍之介はちよつと眉を上げ、フツと息を吐いた。唐突にあたしの手を解放して、

「いいえ、別になんでもありません。不快な思いをさせてしまったすみませんでした」

先に行きます、と会釈をして龍之介は歩いていく。

突然の龍之介の態度の変化にあたしは一瞬ぼかんとしてその背中を目で追った。汗ばんだ右手に残った感触と体温が混乱に拍車をかける。

なにそれ。というか、今はいったいどんな状況で、あたしはなにをどう思えばいいの？

去り際の龍之介の口元に意地の悪い笑みが浮かんでいた気がしたのは気のせいだろうか。
意味もなく泣きたくなってきてぎゅっと目を閉じた。

自覚する恋心

たとえば子供のころ、友だちに「誰々のことが好きでしょう」と言われた時、違う、とかたくなに否定するタイプと、そうかもしれない、とその気になるタイプがいたと思う。

どうやらあたしは前者のタイプだったらしい。

さんざん龍之介に好きだと言われ、千紗にすら、

絶対恋です。

と断言され、改めて考えてみるとそうかもしれないという気分になってきた。いや、単にあたしが流されやすい性格だったって考えなくもないけど。

それにしても、まさかあたしが恋をすることになるなんて、思ってもみなかった。だって最後に異性を好きになったのって、小学生のころで、好きだって自覚してからその先どうしていいのかさっぱり分からない。

告白するべきだろうかとか、でもその後のこととかさういったものもろのこを頭の中でぐるぐると考えていると、なぜかタイムミンクのいいことに体重計が壊れた。愛着があるわけではないけど長年使っていたものだけにちょっとショックで、そのせいだろうか、なんだか何もかもがどうでもよくなってしまうた。

さて、どうしよう。

事務所の扉の前に突っ立ったまま、あたしは腕を組んだ。

結局昨日はやけになって寝てしまったけど、結論を出さないままだったのでどうしていいのかわからない。

いやでも今は仕事に集中よ。平常心、平常心。

両手で両頬をパチンとたたいて気合いを入れる。

「おはようございます」

突然耳元で思いがけない声をかけられて飛び上がった。

「ぎゃっ……！　じゃなく、おはようございます」

予想外の事態に、あたしの心臓は激しく動悸を打つ。なんで今朝に限ってこの男はあたしよりも後に出勤してくるのよ。

睨みつけると龍之介と目が合って、急に恥ずかしくなって視線を逸らす。今、あたしの顔は絶対赤くなっているに違いない。

「どうしました。具合でも悪いですか？」

覗き込んでくる龍之介は心配が半分、面白半分な表情をしていて、明らかにあたしの様子を見て楽しんでいる。

「いえ、全然、どこもなんともありませんから」

本当は心臓バクバクいつてるし、血圧も上がっているに違いない。

「昨日は暑くてあんまり眠れてないだけです」

大丈夫です、と両手を振って逃げるように扉を開けて事務所に駆け込んだ。

告白するとかしないとかの問題じゃない。まともに龍之介の顔を見ることすらできないなんて、どこの小学生ですか。この調子で毎日顔合わせるのは精神的苦行以外のなにものでもないわ。

後ろに続いて龍之介が入ってくる気配を感じながら、動悸のおさまる気配のない胸を押さえた。

爆弾発言

「吉井さんはどうして設計士になろうと思ったんですか？」

おなじみとなったバス停までの送りが今日は珍しく龍之介ではなく吉井さんだったのでぼつぼつと話しながらの帰り道。いつもより少し時間が遅いせいか歩道に人はちらほらと見えるだけで、なんとなくゆっくりとした歩調で歩いていた。

吉井さんは少し首を傾げて考えたあと、

「うん。僕ね、昔からプラモデルを作るのが好きだったんだ」

「はあ……」

唐突な話で思わず間の抜けた声を出してしまった。けれど吉井さんは特に気にする様子もなく、ちよつとだけあたしに笑いかけ続けた。

「でね、建築って自分の考えた建物がそのまま現実になるでしょ。

二次元が三次元になるのを見たかったんだ」

と言うと吉井さんは照れくさそうに笑う。

「奥さんに言うと、子供っぽいって言われるけどね」

「そんなことないです。素敵な理由ですよ」

「そうかな？」

はい、とあたしはことさら大きく頷いて見せた。

「ありがとう」

そういつた吉井さんの声のトーンが突然一段上がった。

「ところで、僕も一つ聞いていいかな？」

「どうぞ」

とくになにも気に留めず軽い気持ちで先を促すと、吉井さんは少しだけ言いにくそうに口ごもってから、

「いつから龍くんのこと好きだったの？」

……………。

たっぷり五秒は思考が停止した、と思う。

だってなんで吉井さんにはれてるの。絶対に、一番こういうことには鈍そうなのに。それに事務所ではがんばっていつも通りの態度をとってるのに。自覚した初日こそおかしな調子だったのは間違いないけど、でもなるべくいつもどおりに振る舞ったはずなのに。もしかして、千紗が喋ったとか？ いやいや、それはあり得ないですよ。二人の接点がるまるでないのにそれは言いがかりだわ。

そして肯定するべきなのか否定するべきなのか。ここはそんなことないってきっぱり否定しておいた方が明日からの仕事に支障がないのかしら。

ちら、と吉井さんを盗み見ると、困惑した表情で頭を掻いていた。ちよつと待って。

『いつから』ってことは、もうばれてるってことよね。否定してもあんまり意味がないってこと？

「……なんで知ってるんですか？」

考えた結果に出た言葉はそれで、上目づかいに吉井さんを見上げる。顔に熱が集中するのがイヤって言うほどわかった。

「なんでってというか、花ちゃん最近様子がおかしかったから」

「最近っていつからですか」

火照った頬を両手で冷やししながら口を尖らせる。こういうときに末端冷え性だとありがたいわ。

吉井さんは視線を彷徨させたあと、慎重に口を開いた。

「花火大会の後だから、えーと、十日くらい前かな」

それって、それって、あたしが自覚した時からってことですか。

鈍そうに見えるのは、単にそう見えるだけで実は結構鋭いんですか。

シヨックのあまりしゃがみ込んでしまったあたしに向かって心配そうに声をかけてくれる吉井さんを見上げておそろおそろ確認する。

「……バレバレでした？」

「う、うん。……ちよつとだけ」

ちよつとだけってどっちですか。そしてバレバレっていうのはど

「こまで？」

「まだかさんや龍之介本人も知ってるってことですか。」

「あ、花ちゃん、バスが来たよ。急がないと」

吉井さんに引きずられてバス停に行き、乗せてもらった後も頭の中はぐるぐるで、バスのアナウンスにも気付かず乗り過ごして駅まで行っていた。

「いやだつて。だってこれは動揺するでしょう。」

それになんて今まで皆黙っていたの。ちよつと声かけてくれればいいのに……いや、それは無理か。

吉井さんだからこそ言ってくれたんであつて、まだかさんはきつとこういうことには口を出さないだろうし、龍之介にいたってはそんなこと言おうものなら自意識過剰って指さしてやったに違いない。

「うん？」

「何かが引つかかった。」

『好意と嫌悪は似た感情だつてご存知ですか』

なんだろうと記憶をさらって浮かび上がった言葉は龍之介のもの。あの時は何言っているんだろうと気にしなかつたけど、よくよく考えてみたらあの男はあたしの気持ちを知ってたつてことだろうか。あたしが自覚するよりも先に。

そう考えたとたんに胃のあたりがキュウつと締め付けられる痛みを覚えた。

もし、知つてて今まで知らんふりしてたとしたら、あたし馬鹿みたいじゃない。それともあたしのうるたえる様を見て楽しんでいたとか？

「そうだったら最低だ。」

キュツと口を引きしめる。鞆から携帯を取り出すと千紗にメールを送り、それから乗り場に向かった。

缶コーヒを片手に公園のベンチで時間を確認する。夏でよかつ

たわ。これが冬だったら絶対に耐えられないに違いない。

携帯を閉じて視線を道路に向けるとちょうど龍之介が歩いてくるところで、飲み干した缶を肩がごに投げ入れて立ち上がると大股でそちらに向かう。

「お疲れ様です」

と言った声が入り込んで予想外にうわずうわずしていたけれど気にする余裕はない。

街灯から少し離れた場所だったため龍之介の表情ははっきり確認できないけれど、わずかに驚いているようだった。その腕を掴んで龍之介の顔を見上げる。

「これから、ちょっと付き合ってください」

ベッドに入って

懐かしさを覚える九十年代のヒットナンバーに耳を傾けるふりをしながら正面に座る龍之介を盗み見た。

「というか、この店のチョイスはどうなのよ。」

こちらから相談を持ちかけたことを棚に上げて、提案者の顔を思い浮かべると心の中で舌打ちする。『ここがお勧めです！』とメールにもかかわらず力強く言い切った千紗の言葉を信じたのに。

霞がかつたような店内は食欲をそそる匂いで充満していて、家族連れのにぎやかな声が時々聞こえてくる。きちんと仕切られた空間の真ん中にテーブル。その中央あたりに金網が据えてあり、その上でじゅうじゅうと音を立てながら肉が焼かれていて、時折、ちらりと脂を吸った炎が肉をなめる。

「これじゃあムードもへったくれもないわよ。」

ぐい、とグラスの中身を流し込むと、喉が焼ける感覚のあとに芋焼酎独特の香りがクンと鼻に残る。息を吐いてそれを逃がすと箸を取り、焼けた一切れを口に運んだ。

本来ならきつとおいしいはずの上カルビも今は緊張でほとんど味がしない。というか、たぶん今ならゴムを食べさせられたってカルビと間違えるに違いない。

龍之介はと言うと、特になにも聞いてくることもなく、黙々と肉を焼いては平らげていく。

肉を焼いているからいいものの、でもやっぱりいたたまれない。緊張を紛らわせるためだけにいつになくハイペースでお酒を飲む。

「そんなに飲んで大丈夫ですか？」

と、龍之介が聞いてきたのは六杯目のお代りを頼んだときだった。あんまり食べていなかったのもあり、ちょうどいい具合に気持ち良くなってきた頃合いだったので、なんとなく水を差された気がして唇を尖らせる。

「焼酎ガバガバ飲む女は嫌いですか？」

それを聞いた龍之介は驚いたように動きを止めた。
なに言ってるのよ、あたしは。

自分の発言に驚いてどうにかしてごまかそうと理性が働き始める
より早く、酔いに任せて口が勝手に回る。

「チューハイやカクテルじゃなくて、焼酎や日本酒を飲む女はダメ
ですか？」

「べつにそれは好き好きですからいいと思いますよ」
「……ありがとうございます」

店員さんが運んできたグラスを早速口に持って行きながらちよつ
と頬を膨らませる。適当に言われた気がして癪に障った。

どうせ本当はドン引きしてるに違いないのに。

ふと、そこで会話が切れた。さっきまでの無言とは比べものにな
らないほどのプレッシャーを感じて、何か話さなきゃと話題を探し
て視線を彷徨わせる。龍之介を見れば、相変わらずマイペースに肉
を焼いている。

というか、なんであたしだけこんなに緊張してるわけ？

そう思ったとたんに意味もなく怒りがこみ上げてきた。

「……鈴木さんは、ずるいです」

口から転げ出たのはそんな言葉だった。

龍之介は眉根を少し寄せてこちらを見る。一瞬言葉を飲み込みか
けたけど、口が勝手に動き出す。

「いつもなんにも喋らないで、黙ったままで。なにを考えてるのか
わからなくて、どうしていいかわからないときに、たまに口を開い
たと思えば妙なことを言うし、なんなんですか」

「妙なことを言っているつもりはないんですが」

「鈴木さんにはそのつもりがなくても、あたしには妙なことなんで
す」

じつと下から睨みつけるように見ると、箸を置いた龍之介はグラ
スに手を伸ばす。

「す、好きだとか言って、あたしの反応を見て楽しんでるんでしょ」

誰かあたしを止めてください。これ以上何か言う前に。

でも現実であたしの目の前には龍之介しかいなくて、止めてくれる人間は誰ひとりいないのだ。

「そう言われるたびにあたしがどれだけ緊張するか、わかってます？」

「好きだから好きと言ってなにが悪いんですか？」

「すっ……」

だから今、そういうこと言うなっただばっかりなのに、なんでこの男は言うのよ。

落ち着け。落ち着けー、あたし。

冷静になろうとグラスの一口飲み込む。とたんに喉が焼けるように熱いけれど、今はそんなこと気にしてられない。ドン、とグラスをテーブルに置いて、

「だから、そういうことを言われると、もう、どうしていいかわからないんです。これ以上言わないでください」

「どうしてですか？」

理由を教えてください、と龍之介は言う。

見つめられていると自覚すると急に身体が熱くなる。いや、これは酔ってるからだ。喉を潤そうと焼酎のグラスを持ち上げかけるのを、龍之介の手が遮った。

「山田さん？」

龍之介の瞳は、どこかこの状況を面白がっているようにも見える。知ってるくせに。

この男はあたしの気持ちなんてとっくにお見通しで、そのうえで知らんふりをしていたのだ。

ふっと息を吸うと、

「……好きだからです」

もうどうにでもなれ。

「好きなんですよ。悪いですか」

ほとんどわめくように言っただけ焼酎を一气飲みする。

あ、まずい。

空きつ腹で飲んでたせいでとうに限界を超えてしまっていたのにそれでも何とか理性を保っていたのは緊張していたためだ。その緊張が解けて今までのツケが回ってきた。

「べつに悪いとは言っていないですよ」

こみ上げてくるものを感じてトイレに向かう後ろで龍之介が満足そうにつぶやくのがかろうじて聞こえたのが最後だった。トイレまで自力でたどり着けたのかさえ、記憶にない。

あたし、洗剤変えたっけ？

慣れない香りが意識を浮上させた。

頭が重い。身体がだるい。

飲みすぎた翌朝はいつもこう。そのたびに反省するくせに、半月もすれば同じことを繰り返すのは、結局は反省していないからだと思ふ。

瞼を閉じたまま、次からはもっとしつかり節度を守って飲もうと誓うのも、何度めだろう。

まあでも、昨日は仕方ないわ。飲まなきゃやってられなかったのも事実だもの。

ため息を吐いて起き上がる。

あれ？

見慣れない風景が目の前に広がっていた。テレビも本棚も机もタンスも確かにあるし、生活感満載なんだけど、あたしの部屋ではない。

どこだ、ここ？

見慣れないはずなのになぜか既視感を覚える風景に嫌な予感がないこともないけど、まさか。

「おはようございます」

打ち消しかけた考えを決定付けるように背後からかけられた声に驚いて飛び上がる。

この、声は。

恐る恐る振り返れば、そこに立つのは予想通り龍之介。なぜか上半身だけ裸で、マグカップを片手にこちらを見ている。

思い出したくない記憶がよみがえってきて、はっとして自分の格好を確認する。よし、服は着てる。

胸をなで下ろすと龍之介が笑う気配を感じた。

「昨夜はなにもしてませんよ。安心してください」

そう言ってマグカップをテーブルに置くと大股で近づいてきて、ベッドに腰掛ける。

身を引こうとしたあたしは腕を掴まれてベッドに押し倒された。

……というか、待って、この状況はやばくないですか？

「あ、あの、昨夜はいろいろとすみませんでした」

「謝る必要はありませんよ」

間近に迫る龍之介の笑顔に身がすくむ。

「ええと……。ちょっと近すぎませんか？」

もう少しだけでいいから離れてほしくてそういえば、

「そうですか？」

と龍之介はそっけなく言うばかり。

そうですかじゃなくて。なんだか今、あたしものすごく貞操の危機を感じてるんですけど。

「あ、あの、鈴木さん……」

「お互いの気持ちもわかったことですし、もっと親密になってみませんか？」

耳元でそう囁かれると、心臓がどくどくと早鐘を打ちだす。

「し、親密になるには、いろいろとまだ順番があると思います！」
すると龍之介はわずかの間考えるそぶりを見せたあと、身を起しました。

よ、よかった。

ほつと胸を撫で下ろすあたしを見て、

「順番……。そうですね。そう焦ることもないか……」

「あの……？」

ぶつぶつと呟いていた龍之介は、ひたとあたしの顔を見て笑みを浮かべた。

「覚悟しておいてください」

覚悟って何のですか。

蛇に睨まれた蛙のごとく固まったまま、喉の奥で叫んだ。

ベッドに入って（後書き）

ここまでお付き合いいただきましてありがとうございます。

中途半端な！と言われそうですが、とりあえずこの二人のお話はこれでおしまいです。またひょっこり続きを書く気になればこちらに載せようと思っていますので、その時はよろしくお願いします。

番外編 ラブリードッグ（前書き）

GREEの小説部屋というコミュで期間限定企画「ときげんアニマルパジャマ祭」参加作品です。6月いっぱい企画だったので、こちらに移すことにしました。

本篇の内容とは全く関係ありませんのでご了承ください。

番外編 ラブリードッグ

龍之介がそれを発見したのは偶然だった。

食事を済ませ、ぼんやりとテレビを眺めていると、視界の隅に違和感を感じて視線を向けた。クローゼットから淡いピンクの布が顔を覗かせている。おおかた洗濯物を取り込んだときにはみ出してしまったものだろうと見当をつけたものの、どうも気になった。

部屋の主を振り返れば鼻歌まじりに洗い物の最中で声を掛けるには躊躇われ、仕方なしに腰を上げてクローゼットを開いた。

案の定それはワンピースで、ハンガーからずり落ちかけていたのを直してやる。あとはとくに乱れがないかを確認するためにざっと見渡し、少々気になるものを発見した。無造作に置いてある箱である。その蓋の下からわずかに飛び出した純白の柔らかそうな質感のそれを取り出したのは、単純な好奇心からだ。

蓋を開けて触ってみれば見た目通りの質感で、ずるりと引っ張りだすと予想外に長さがあった。

それがなんなのか確認し、思わず持ち主を振り返ると、ちょうど終わったようで冷蔵庫を覗き込んでいる。それを体の影になるよう少し移動させ、龍之介は恋人を呼んだ。

洗い物を終えた花が缶ビールを手にとってきたところでそれを目の前に差し出した。

直後、ゴトンと缶ビールが落ちる音が響く。

落とし主は差し出されたそれがなんなのか瞬時に理解し、驚きに身を震わせた。

「……な、なんでそれ持つてるのよ!」

ふつくらとした頬を紅潮させた花に向かって、龍之介はさらにそれを押し付けるようにしながら上部とおぼしき部分の突起をつまんでみせる。

「偶然見つけた。……これ、趣味?」

ふわふわの質感の突起・・・おそらく耳と思われる・・・を弄びつつ花の反応を愉しむように尋ねた。

「違うもん!」

「へえ。じゃあなんでここにあるんだ?」

顔を真つ赤にした花はそう問われて言葉に詰まった。

「そ、それは忘年会の余興で使ったやつで、千紗が……」

もももごと口の中で何か言っている風だが、龍之介にはさっぱり聞き取れない。

もとより彼は言い訳などに興味はない。それよりも偶然見つけたこれを着た花の方に興味があつた。異常なまでに爽やかな笑顔で、

「着てみて」

途端に花は、トマトを通り越してパプリカもかくやと思わせるほどに赤い顔で頭を振る。

「無理!」

「どうして?」

「どうしても!」

とんでもないと首を振る。

その様子を見た龍之介に、わかった、と言われたとき、花は心の底から安堵したが、

「着ないなら、吉井さんにこのことをばらすけど、いい?」

そのひとことで凍りついた。

吉井さん・・・その名前は魔法の言葉かと思うほど有効だった。見開いた瞳を右往左往させる花の様子に龍之介は嗜虐心をそそられ、そつと耳打ちをする。

「このこと知ったら、あの人のことだから飲み会るときに全員分用意するだろうね」

そうなったが最後、厭というほど写真を撮られ・・・本人には決して悪気があるわけではなくむしろ好意からだろうが・・・知り合いという知り合いにばらまかれるに違いなく、即ち彼女の前の職場の知

り合いの手元にも届くだろうと予想できた。それは龍之介も被害を被ることになるのだが、混乱している彼女がそこに気づくことはないと思われた。

涙を目に浮かべた花がこちらを睨みつけるのを冷静に見つめて次の言葉を待つ。

「絶対にムリ！ 着れない！」

どこまでも頑なな態度に龍之介は眉をひそめる。付き合い出して半年ほどになるがここまで拒否し続けるのを見たことはない。適当なところで折れるのがいつものパターンのだが今夜はどうも違らしい。そう思っ眉を寄せると、

「だってそれ、男性用なもの！」

半ば悲鳴をあげるように花が言った。

男性用、と龍之介は口の中で繰り返し手元のそれに視線を落とす。なるほど言われてみれば確かに花が着るには丈が長いようであった。つまり花が着たものだとばかり思っていたが男性用とは。一体誰のものなのかと花を見れば、怒ったような表情にぶつかった。

「……着てよね」

地の底から響く声色で花が言う。

「……は？」

「それ。着ないと吉井さんに言うんでしょ」

だから着てよねと頬を膨らませる。

意味が違うだろうと口を開きかけたが、

「何か反論がある？」

「……………いや。すみません」

迫りに圧倒されたというかなんというか。こうして龍之介わんこ（紀州犬モデル）が誕生した。

その純白の毛並みにうっとり顔を埋める花を見て、たまには悪くないかと龍之介が思ったのは秘密である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5144i/>

ホログラム

2010年10月8日11時38分発行